
微瞑むように 【第二話 今にも落ちて来そうな屋根の下で】

ブシィ=ナスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微瞑むように 【第二話 今にも落ちて来そうな屋根の下で】

【Nコード】

N1796B

【作者名】

ブシィⅡナスカ

【あらすじ】

「この世界の裏側には、冥界があるんだよ。不思議な力を持った冥人達の幽玄の世界さ」ボケたばあちゃんの世迷い言だとばかり思ってたけど、なんか本当らしい。ついでに、決して交わる事の無い二つの世界の番人らしい。……村一番の、あの馬鹿が。一話完結型ライトファンタジー、第2話。

（匂いがするね）
（うん、匂いがする）
（どっちの匂い？）
（どっちだろう？）
（一緒だよ）
（そうだね、一緒だ）
（来るかな）
（きつと来るよ）
（だって、来なきゃいけない）
（来なきゃ不思議なもの）
（歓迎しようか）
（勿論さ）
（何て言う？）
（おかえりなさい？）
（お久しぶり？）
（はじめまして？）
（それとも）
（いただきます？）

第二話 今にも落ちて来そうな屋根の下で

美しい青空である。
鳶が大きく輪を描き、霞のような雲が遠方の地上付近で風に攫わ

れていた。春真つ盛りの麗かな昼下がり、恋のひとつでもする気にさせる空気を孕んでいた。

その青空の下、極寒の時化を纏った少女が盛大な溜息を吐いていた。ここ数日で優に百回は超える溜息は、ともすれば本人でさえ悩みがあるから溜息が出るのか溜息が出るから悩みがあるのか、判別する事を危うくさせている。

少女は地べたの草原に座り込んで、手元の淡い桃色の布に留めてあった町針を凝視する。うるさい太陽の主張に耳も貸さず、そっと針を摘んだ。静かに抜き取り、位置を僅かにずらして再び刺す。そしてまた抜き取り、刺し、抜き取り、刺し――。

「……………何してんの」

「あひゃあ」

突然背後から声をかけられ、少女はおざなりに立ち上がり、振り返る。そしてスカートの端を摘むと、

「今日のテーマは社会の歯車になんてなりたくないと慟哭するミノ虫の涙です」

と面倒臭そうに溜息混じりに言った。

声をかけた張本人であるキリアは、じっと少女を見つめていたが、やがてぼそりと呟く。

「……………それ、一昨日着てた茶色のやつだろ。今日のは黄色じゃねえか」

言われて初めて、少女――ガリーナはスカートを摘み上げたままその色に目を落とした。そしてたつぷり一呼吸分の沈黙の後、間違えました、と矢張り溜息混じりに答える。

「カラメル嫌いのゲンさんちで出た誕生日のプリン、でした。私としましたが、うっかりさんです」

なんで素直に黄色ですと言わないのだろうとキリアは毎回脳裏を過ぎる疑問を看過し、彼女の持っている布に目をやった。可愛らしい清楚な桃色の服を作るつもりなのだろう、彼女はこここのところ毎日この布を持って自宅の寺院や川辺やここの様な草原に座り込んで

いた。あれだけの時間を費やしているのだから、それなりに服の形を作っているだろうと思っていたのだが、布は未だ単なる布のままである。

先程から彼女はずっと、町針を抜いて刺して抜いて刺してを繰り返し、布に微細な穴を開けているだけのようだった。まさかこの数日間、延々とそれを繰り返していたのだろうか。

「お前、とうとう本気でヤバイアレな人になっちゃったのか……」
きいい違います何ですかアレな人って許しませんよ小童、と普段ならこう来る。

しかし、少年の揶揄に僅かに眉を垂れただけで、ガリーナは何も言いつ返さず再び草の上に座り込んだ。

そして再び針で布に穴を開け始める。

「もう止めるよ、この布だって高いんだろ！ 可哀想じゃないか！ お金が」

居たたまれなくなったキリアが布を引ったくり、そしてすぐに奪い返された。彼の言葉は確かに耳に届いたらしく、ガリーナは針を放棄して今度は布を揉み始める。穴が開かないだけ良いか、と少年は見つめ振りをした。

暫くの間、少女は消え入るような声で呟く。

「私、カイルさんに酷い事をして……」

「ああ、らしいな」

キリアは適当に頷いて、数日前の事を思い出した。

ミミの策謀によって彼らが二人きりになった際、コイビトタケのコロンの所為で前後不覚に陥っていたガリーナがカイルに十連撃をお見舞いするという事件が起こった様なのだ。頭からだとすると流血しつつも、律儀に少女を村まで送ってきたカイルは、村の入り口まで辿り着いた瞬間に昏倒した。今から思えば、あの鮮赤は動脈だと推測する。

若さの所為か、その後二日もすると彼は大きな絆創膏を額に張って普通の生活に戻ることが出来た。今も大事をとってこの村の宿で

安静にしているはずだった。

「でも、謝ったんだろ？ あの兄ちゃん、本気でキレると滅茶苦茶怖いけど、筋が通ってる事には安易に怒ったりする奴じゃないぞ」

観察する時間は僅かではあったが、先の件でキリアは彼の性格の大方は把握したと思う。普段は控え目な性格だが、その実裏でとてもない事をしていても同じ顔を保つ豪胆さも併せ持ち、誠意の無い事——特に料理に関しては瞬間的にリミッターが限界を突破する。繊細なのか直情型なのか、意外と解り易い性格だとキリアは考える。

この馬鹿と比べれば、天と地ほどに。

「謝りました、カイルさんが昏睡している時に耳元で百回、目を覚ました時に土下座で四十回、夜寝る前のおやすみ代わりに二十回、謝りに謝り通しました。一生分のごめんなさいを一日で言いました。でも、カイルさんは最後にこう言っただけです。『もう来ないで欲しい』って」

「うん、それは多分おれでも同じ事を言うと思う」

真顔で確りと首を立てに振る少年をちらりと見ると、ガリーナは今迄で一番の大きな溜息と共に肩を落とした。

「私、嫌われてしまいました……」

喜怒哀楽の激しい少女ではあるが、大体が常に喜と楽の境をふらふら歩いているような人間なので、時折こうして落ち込むとその余りの差に傍から見ている気が毒になってくる。キリアだって、出来る事ならば仲直りをさせてやりたいとも思うのだが、理由が理由だけにどうしようも無いような気もする。

未だに村の入り口に出来た血溜まりが土に染み込んだために流れないのだ。あれ程の大怪我を負わされたら、キリアならば噛み付いて同じ目に合わせてやったかもしれない。

「……まあ、お前が悪いけど、一番悪いのはミミなんだよな……」

「なんでですか？ ミミさんは関係無いでしょう」

一切合財の記憶が吹き飛んでいるガリーナは、不思議そうな顔で今もカイルと同じ宿屋で寝泊りしている王都からの客を示した。何

でもない、とミミに硬く口止めをされているキリアは、目を逸らして同じく草の上に座り込む。

それきり二人は黙り込んだ。辺りを満たすは風の音と草の音、鳥の声、ガリーナの溜息。

その時、

「あ……あの……っ」

小さな小さな声がして、二人はぐるりを見廻した。

すると、何時の間に居たのだろう、見たことの無い顔の少女が不安げな表情で背後に佇んでいた。ガリーナと同年代だろうか、一見して目を惹くのはその明るい桜色の染髪だった。チョッパヤ通りの大工の息子が何かの実で緑色の染髪をしていたが、この村でこれほど鮮やかな色を出せる道具があるとは思えない。

ガリーナは思わず自分の持つている桃色の布と見比べ、「ちよっとしつこいかな」と呟く。すると相手は体を震わせて、縮めていた身を益々小さくする。

一方、キリアは桜色の髪よりも胸部に視線を置いていた。

「でけえ」

「えっ？ あ、あの、ご、ごめんなさいやっぱり気持ち悪いですよね、変ですよ、すいません！」

見知らぬ少女は両肩を抱きしめるようにして後退りをし、泣きそうな顔を作る。ガリーナがぺちんとキリアの額を叩いて叱責し、「何でしょうか」と笑顔で尋ねると、桜色の少女は眉を下げ、喉を鳴らし、二人の顔を交互に見比べ、実に長い躊躇の後にやっと声を出した。

「わ、わ、わたしと、しよしよ、しよ」

「しよ？」

「しよ、しよ、しよ……」

「あ、分かった。しよばん玉ですか？」

すると途端に少女は顔を歪めて目に涙を一杯に溜め、口の中ではないかもしれませんと呟くと脱兎の如く駆けていった。途中、石

かモグラの穴かに蹴躓いて大いにすつ転び、ごろごろと転がりながら坂道を下ってやがて見えなくなった。

二人には啞然とその様子を見送るしか術が無かった。

春になればああいう変なのがぽこぼこ沸いてくるから不思議なものである。

「どなたでしょう、可愛い方でしたね。ちょっと挙動不審さんでしたけど」

「なあガリ、しょぼん玉って何」

ガリーナは再び布に目を落とすと、大きな溜息を吐いてから立ち上がる。

「それより、カイルさんです。もう一度ちゃんとお話して、許して貰います。……許してくれると、いいなあ……」

「なあ、しょぼん玉って何」

「頑張ります、私。必ず許して貰います！」

拳を握り、草原の果てを強い視線で見据える。一際大きな風が吹き、草色の波と共にガリーナの黄色のスカートもはためいた。

「しょぼん玉って」

少年の問いかけも、最期まで答えを待たぬまま波の泡沫と消え逝った。

+

宿屋の前では、ちょっとした喧騒が発煙していた。

三人の人間がてんでばらばらに——正確には二人が、我が我がと大きな声で喋っている。

「それならわたしの所に来てくれるね？　うちは和気藹々とした素敵な職場ね。お給料もはずむよ」

「やめなさいよお、ハゲがうつるわよ。それよりあたしんどこに来てよう。サービスしちゃうから」

目を爛々と輝かせて迫る頭髮の薄い小でぶ中年と、胸を強調した

服の女性の二人に迫られ、絆創膏の青年は困惑したように身を引いていた。小でぶは九里金豚のファイ、女性はバーババ亭の女給チタである。二人は火花を散らす視線を交わすと、更に声量を上げてカイクに迫った。

「ロードの料理長を務めたその力、生かせる職場は味覚の金字塔九里金豚しか無いね！ さあいざ共にお玉を携え行進よ、同胞！」

「バーババ亭は出会いの酒場！ 昨日の涙が今日の笑顔、美人にお茶目に割れ鍋綴じ蓋、暑苦しい人情が売りの我が家へいらっしやい！」

カイクの引いた身はどんどんと傾斜を傾け、ずいずいと迫る二人の顔から逃れようと背は三十度近くまで反り返った。

領主お気に入り料理人がフリーになった、というのは彼らにとつては無視出来ない事態である。味方につければ心強い分、敵に回ると恐ろしい。そんな心理から、引き抜き合戦が進退きわこれ谷まるのも当然のことだと言えた。

当の本人は幾度か言葉を挟もうと努力はしているようだが、口をばくばくさせるだけで二人の気迫にとても分け入る事は出来ない。しまいには二人の熱は急激に上昇し、カイクそちのけで大喧嘩を始めてしまう。口を挟むことが出来ないで、ただその口論を眺めることとしたカイクは、ファイが実はカツラだとかチタの胸は偽物だとか酒に水を入れて薄めて出しているとか彼氏が豪く個性的な顔だとかゴキブリ入りのスープを出したとか給料未払いだとか、有益な情報を手に入れることが出来た。

だがすぐに飽きた。

絆創膏を弄りながら宿屋の玄関にもたれ掛かってひらひらと舞う蝶を目で追っている所へ、派手な格好の副村長がやって来た。

「客人、具合はどうだい？ まあ急がずに、全快するまでゆっくりしてけや。田舎もいいもんだろ」

彼は一瞬だけ悪口雑言戦争を一瞥し、すぐに笑みを作ってカイクと向き合う。カイクは会釈して、「もう平気です」と返した。

「ところで、領主の屋敷が局地的な嵐だか何だかで滅茶苦茶になっちまったって聞いたが、あんたこれからどうするつもりなんだ？」
「その事なんですけど、出来ればこの村に住まわして貰えないでしようか。元々が風来の者ですから、一つの地に長く居過ぎるのも性に合わなくて。どこか空いている部屋にでも」

そりゃ願ってもない、とマーブルは口の端を上げて青年の肩を叩いた。

最近王都主義と呼ばれる世代の若者がどこでも増えていて、将来ある若い者ほどお洒落な王都にと流出してしまう。この村も例外ではなく、村内会書記官が計算したところによると、現状のままでは百年後には人っ子一人居ない廃村になってしまうという結果が出た。ただし、この計算では産まれる子供の数を計算に入れなかった為、甚だ信憑性に欠けるというのがもっぱらの噂である。

とにかく、重鎮連中に見れば若者が一人増える事は村の為に良い、という訳だった。

マーブルはカイクの肩に手を回し、辺りを見廻してから声音を落として囁くように言う。

「ひとつ、良い空き屋敷がある。村外れという多少利便性には欠けるが、まあ小さい村だから問題無かるう。庭付き二階建て地下倉庫あり、裏庭には井戸があつて付いてくる土地も十・十トーマス（注釈：トーマスおじさんが十人寝ところがつた長さの二乗）、厩もある。どうだ？　良い物件だろ。というか他に空家は無い」

青年は豪勢な単語が連なるにつれて徐々に渋面を作り、老人の派手な色眼鏡の奥を見据えて低い声で尋ねた。

「……で、お値段は」

「タダだ」

「タダあ！？」

声がでかい、とマーブルが小さな声で怒鳴ると、カイクは口を引き結んで眉を顰めた。

そんな立派な屋敷ならば、月々最低七万エンスは出さねばならな

いのが普通だろう。勿論、領主からしこたま奪い取った退職金や何やらで彼にとっては払えない値段ではなく、寧ろ千万エンス程度ならば買い取る事も可能である。

そんな屋敷がタダ。

「……………胡散臭い」

ぼつりと呟いた青年に、マールは慌てて言葉を継いだ。

「理由があるんだよ！ 七十年近く前に主が出てったきり、放ったらかしでな。あちこちガタが来てるから修理やら何やらが必要で、そんな金は誰も出せないしで。ま、一度見てくれりゃ解るがそれでもそんなに悪くない」

早口に言つて肩を竦め、副村長は小さく頬を引き攣らせる。カイルは訝しげにそんな相手を眺めていたが、熟考の末やがて頷き、その提案を受け入れる事にした。

「では、その家までの道筋を――」

「あおう」

控え目な声が差し挟まれ、彼は口を噤んで一声を発した者を見返した。

何時の間にか後ろにいたガリーナは相手の視線に引き攣り笑いを浮かべると、もじもじと両手の指同士を突付きあつたりぐるぐる回したり印を組んだりと落ち着かない様子を表しながら、遠慮がちに言った。

「宜しかつたら、私のご案内しますけど……………」

「いや、いいよ」

素っ気無いものである。

カイルはそれきり少女から視線を外すと、先にたつマールを追つてさつさとその場を後にした。

頭の後ろで手を組みながら、その鮮やかな別離を背後から眺めたキリアが吐息を漏らす。ガリーナは固まっている。二人の後姿が道の先の角を曲がって見えなくなる頃、少年は彼女の隣まで出た。

「……………泣いてんの？」

「泣いてませんっ」

ずびび、と鼻をすすする音と共に小さな声が返ってくる。

それを合図に、今までずっと延々と口喧嘩をしていたファイとチタが、料理人の居なくなつたことに気付いてまた大騒ぎをし始めた。「カイル君、どこ行つたね！ 話はまだ終わつてないよ！」

「そおよ、あたしんち来てくれるって言つたのに！ 酷い男！」
言つていないどころか、何一つ言葉を挟めずただ蝶々を眺めていたのだが。

「村外れのお屋敷に行きましたよ」

落ち込んだ声で少女がそう言うと、二人は先程までの剣幕が嘘のように黙り込んだ。しんと耳に痛いほどの静寂が四人を包み、お互いの顔を見合わせたファイとチタは、「仕方無いね」「また今度ね」と落胆しつつもその場を後にする。

キリアが頭を掻きながら、地面に生えたつくしを足先で突付く。

「なんであんな所に行つたんだろっ、兄ちゃん」

「そうですね、いつ話しかけようかとときどきしてたので二人の話は全然聞いてませんでした。そしてときどきしただけ損でした。無駄に寿命が縮みました」

死人のような声で俯いたまま言う。その顔はヴェールの陰になつてキリアが見ることは出来ないが、恐らく世にも深く落ち込んでいるのだらう。

「見学、かな。好き好んであそこに行く奴なんかい無いもんね」

突付いても突付いてもつくしは起き上がる。

頑張れガリーナつくしのように、と心の中で激励しながらキリアは続けた。

「——あんな幽霊屋敷」

あくまで伝説という観点から言えば、この太陽と月の元にある世界を人界という。そして例えば蓋の裏にくつついたナモ草まんじゅうのように、人界の反対側にくつついて広がっている夜の世界、これを冥人世界（ミョウジンセカイ）又は冥界と言う。冥人とは、ヒトと似た体を持つ知能生物であるが、その生態はまるで一線を画すものである。曰く寿命はヒトの十倍、子を生さず、恐るべき目に見えぬ力を持つ。尤も、冥人を見たものはほぼ皆無であるため、伝説の域を出ないのも同様である。

さて、人が死ぬとその魂は地面に沈み、冥界へと行き、冥界の空を漂いやがて星になる。

逆に生まれる時は、星が落ち地面に沈み、人界へと浮遊し生物の中に宿る。

このように、人界と冥界は表裏一体、切っても切り離せない存在同士なのであり、冥界の夜の星の力を拝借する冥魔術を人界で多用する事は双方のバランスを崩しかねないと推測される。

但し、それを本心から信じている者は余り多くない。冥魔術遣いですら、それは「冥界の力ではなく、冥府の力だ」と言い放つ。冥府というのは生という壁を越えた者たちの精神世界と定義されているが、検証も何も無いので伝説と大して変わらないものである。

従って、冥界だと主張する聖教会と冥府だと主張する冥魔術協会で絶えず論争が繰り広げられているのも、仕方の無い事だと言える。カイルさんのほか。

今我々に必要な事は、どちらの説が正しいか否かと喧々諤々論ずるよりも、術をどのように社会に貢献する道具とまで昇華させることが出来るかを検討する事であらう。なんちゃってぷー。

冬第二月、アンドルフ助教教授記。趣味はふんころがしをじっと見つめること。

こと、と落書きをし終わると、ガリーナは本をたたんで寝台に突っ伏した。哀れアンドルフ助教授の名著「冥界と人と洗濯板のぬめり取りに関する考察」は意味の繋がらぬ文脈の宝庫と変化した拳句、床へと放り投げられ単なる脚立代わりへと落魄する。元々この本は、漬物石代わりにと隣の村に住む父親から貰ったものなのだ。肝心要目の中身は三頁目に涎の跡を付けられているのだから、後は推して知るべしである。

それよりも今、彼女が本当に読みたい本があるとすれば、それは「サルでも出来る！怒髪天をついた相手に許して貰える方法」なのである。

用無しだとか馬鹿だとか阿呆だとか、そういう言葉には慣れている。どんなに悪口雑言を並べられても、大して何とも思わない。それが普通だと思っていたから。

けれど、あそこまで徹底的に嫌われ避けられるのは生まれて初めてだった。十七年間生きていて、初めての体験なのだ。

咄嗟に枕に顔を押し付け、小さなくぐもった声を出す。

「怖いよう……おじいちゃん……」

一昨々年亡くなった祖父の笑顔が脳裏に浮かび、少女は鼻をすすった。

まさかずっと、この状態なのだろうか。嫌われ続けたまま、怪我の完治した彼は村を出て二度と戻って来ないのだろうか。

心臓が喉元まで上がってくる。息をするのが苦しくなってきた、ガリーナは枕を放り投げた。それはアンドルフ助教授の厚い本に落ちて跳ね返り、ベッドの真下に転がって来た所で、急に手持ち無沙汰になった少女に再び掴み上げられた。

「嫌です、嫌われたまんまなのは絶対に嫌です……」

それは自分の我侭なのだと解ってはいる。都合の良い良すぎる願望だと解っている。

けれども、他人の負の感情を看過する事が出来るほど、彼女は太

人でも無関心でもなかった。馬鹿でも阿呆でも用無しでも良い、どんな言葉でも構わない。その鉄のように堅く冷えた声を溶解してくれるのなら、どんな事でもしようと思う。抱きすくめた枕がみしみし音を立てた。

「もう一度です、これが最後です。全身全霊を賭けて、強烈な土下座を一発かましてきましょう。仕返しに十連撃させると言われたらいくらでも頭を差し出しましょう。そうです、謝るんです！」

鼻息荒くそう立ち上がった時、既に最後の別離から丸二日は経っていた。

椅子の上に丁寧に置かれて置かれたヴェールを取り、髪をその中に仕舞い込む。そろそろ暖かくなってきたので本当は被りたく無いのだが、一応正装なのでしない訳にはいかない。気の置けない村人に会う為ならば構いやしないが、相手は自分に対して激怒している人間なのである。力一杯礼儀を弁えた格好をしていかねばならないだろう。念の為、抽斗を引つ繰り返して、昔母親から貰った香水を一滴耳の裏に付けた。

最後にスカートを叩いて気合を入れる。これで戦闘準備は完了した。一部の隙も無い。

ガリーナは玄関の扉に突進すると、その勢いで扉を開けた。

その瞬間、眼前にちよび髭が襲い掛かる。

「ひょえ！」

奇声を発し、少女はちよび髭を避けた。髭が襲い掛かる訳が無いことは良く考えなくとも分かるようなものだが、彼女にとつてちよび髭は過去の学習により本能が避けるようにと命令を下しているのである。結果、その勢いで地面に顔面から激突し、土埃がもうもうと上がった。

玄関をノックをしようとしていた所だったファイは、矢庭に飛び出しては奇声を上げそのまま地面へとダイブした少女を啞然と見下ろした。

「……せっかく……綺麗にしたのに……」

土や草に塗れた体を大地に横たえたまま、ガリーナはめそめそと顔を覆う。しかし、彼女の奇行にすっかり適応しているファイの次の言葉に、勢い良く体を跳ね起こした。

「あんだ、鐘を直してやる代わりにわたしの言うこと聞くか？」

「本当ですか？ 良かったあ、これで毎日ぼくぼくじゃなくてかんかと鳴らせます！ 何でもしますよ！」

余りの嬉しい衝撃に、カイムの事を瞬間的に忘却してしまう。

例の大地にめり込んだ鐘は、そろそろ居住まいが宜しくなってきたようで、何の違和感もなく玄関先に鎮座している。聖女は律儀にも、時間を知らせる音をそのオブジェから毎日鳴らしていたが、鐘楼にあつた頃を懐古するのも難しくなるほどに、半径八トーマス内を陰鬱に響く。

しかし次に与えられた新たな衝撃に、少女は言葉を失った。

「カイム君ね。うちの店に来るように説得して欲しいのね。わたしはほら、忙しいから、あの屋敷まで行けないし……」

「あの屋敷？ って、あの幽霊屋敷ですか？ ……まさかカイムさん、す、住んでるんですか？」

曖昧に頷くファイの広い額を見ながら、ガリーナは驚きを禁じ得なかった。

あの屋敷——村外れの広い屋敷は村には稀少の裕福を象徴するものであるはずが、何時まで経っても買い手が付かずに放置されていた。何故ならば、七十年近く前に持ち主が蒸発し、それ以来、魑魅魍魎の跋扈する館として恐れられているのだ。幽霊屋敷という簡素な名前の他に、首吊り坂のトンガリ屋敷、悪魔が来たりてほら吹き屋敷、往きは良い良い帰りは怖い屋敷など、適当な二つ名を持っている。

二日前にカイムがマールブルに連れられて向かったのを見たが、ガリーナはそれをただの胆試しだと思っていた。まさか住むなどと、誰が考えただろう。

実は彼女は、幼少期に一度だけ赴いた事がある。しかし、その記

憶が無い。気が付くと真夜中、大人達に手を引かれて屋敷から自宅へ繋がる道を歩いていた。恐らく、余りの恐怖体験に記憶が綺麗に吹き飛んでいるのだらうと思う。

さて、一大事である。

ガリーナは彼が未だ宿にいるものだと思っていたのだ。幽霊屋敷に居るとなれば、カームに会いに行く勇氣に加え、幽霊に会いに行く勇氣も加算しなければならぬ。

すっかり意気消沈してしまった少女を追い立てるように、ファイは唾を飛ばした。

「鐘は平気よ、さつき暇そうな人見つけたから。一緒に手伝ってくれるって、ね、あんた」

すると、ファイの後ろで曖昧にああとかううとか呻き声が聞こえた。

全く気付かなかったが、彼の背に隠れるようにして何時ぞやの桜色の髪の少女が小さくなつて俯いている。存在感がこれほどまでに稀薄な人間も希少だろう。

「あら、この間のしょぼん玉の方ですね？ どうもありがとうございます」

微笑むガリーナを一瞬だけ上目遣いで見ると、彼女は地面を向いて顔を赤くしたり青くしたりする。蚊の鳴くような声で「わたし、その、」と何かを言いかけるが、声量の大きいファイが遮った。

「さ、行ってくるね！ 九里金豚の未来はあんたにかかっているよ！」

その言葉に奮い立たされたのか、

「望むところです、こちらから宣戦布告させていただきます。幽霊など何するものぞ、我が土下座を邪魔するものはおじいちゃんの入れ歯で撃ちてしままん、つてもんですよ」

俄然鼻息を荒げて行ってしまった彼女を見送りながら、あの子は少し読む本を選んだ方がいい、とファイは漠然と考えた。次に彼は聖女を泣き出しそうな顔で見送る少女を見ると、彼女が大事そうに抱えているものに気付く。

「あんた、いいフライパン持ってるね。料理するの？」

「え……？ あ、いえ、あの、これは、殴る為に」

「は？」

「う」

それきり黙りこんでしまった相手を不審げに見下し続けると、相手はどんどん萎縮して小さく小さくなつてゆく。彼女が芋虫より小さくなる前に、ファイは鐘を持ち上げるよう促した。

+

とは言つものの、やっぱり怖い訳で。

「今日のテーマは踏ん返り返ってブリッジにゃんこの面の皮ですっ！　こんにゃろめ！」

朱色である。

何故か息巻いている聖女を尻目に、キリアはしゃがみ込んだまま雑草を取る手を休めずに大根と芋の成長を憂慮した。この時期になると、当地特有の虹色の芋虫が葉を食い荒らすために卵から孵る。普通の芋虫ならば潰して肥しにして終わりだが、どうもこいつは炒めてやると良い酒の肴になるらしい。九里金豚かバーババ亭に持つていけば、一匹三エンス程度で買ってくれるので、少年にとって畑の手入れついでの良い小遣い稼ぎになるのだ。

肩から提げた小さな虫籠一杯に蠢く色鮮やかな芋虫を見下ろし、キリアはにんまりと笑った。

「三百は堅いな。ああ、労働つて素晴らしい」

くつくつと喉の奥で笑い声を漏らす一方で、蔑ろにされたガリーナは寂しそうに隣にしゃがみ込んでその手元を見つめている。そして不意に籠に手をかけ、

「えい」

ぱちんと蓋を開けて逆さまにした。

滝のように落下し、そぞろ這い逃げる芋虫達。

「んな、何すんだああ!!」

「キリアは私なんかより毛虫の方が大切なんですね！　ひどいです！」

「当たり前だこのおバカ——!!」

よじよじ逃げる芋虫を引っ掴み、ガリーナに投げ付ける。それでは飽き足らず、まだ収穫には早い大根を抜き取ってぼこんぼこん殴りつける。

すぐに我に返り、踏ん反り返ってブリッジにゃんこの面の皮色のガリーナにたかった虹色の生き物を摘み上げて籠に再び放り込むが、大根を振るう手だけは休めなかった。

「あーあーもう……餓鬼みたいなことすんなよな。で、何なんだよ」「今日、こそ、ちゃん、と、あや、まり、に、いた、痛い、です」

ぼこんぼこんと頭が揺れる度に言葉も揺れる。たんこぶがもりもりと成長するのを見て、流石にキリアは大根を捨てた。

「じゃあさつさで行けよ。なんでいちいちおれに言いに来るんだよ」「む、そう言えばそうですね。そうだ、きっとキリアが私と遊べなくて寂しい思いを」

「してない」

「……ですよね。じゃ、うつくすい私といつも一緒に居たいなんて思いを」

「抱いてない」

「……ですよね。じゃ、行ってきます」

寂しげに頷くと、スカートの土を掃いながら彼女は立ち去って行った。その小さな後姿を見送ると、少しだけ罪悪感が生まれてきたように感じ、キリアは雑草を思い切り引き抜いた。

本当はついて行ってやりたいが、これは自分の出て行くべき問題ではない。彼女自身が解決しなければならぬものなのだ。頑張れガリーナ芋虫のように、と雑草と芋虫に注意を払いながら思う。

（それにしても変だよなあ、兄ちゃんの態度。怒るにしてもどうも不自然というか）

少なくとも、ああいう陰湿な怒り方はしないと思っていたのだが――。

あれではまるで、彼女が近づく事を厭うているようではないか。大きく息を吐くと、考えるのを止めて再び虹色がぎっしりと詰まった牢獄を持つて立ち上がる。今の内にどちらかの酒場に持つていけば、今晩中に商品として出せるだろう。待つてろ三百エンス、と呟いて大通り――ただの貧相な道なのだが、村の面目上そう呼ぶ事を好まれている――に出た。

すると、村の入り口付近で数人が佇んで話をしている姿が目に入る。その内一人は世話好きで名を馳せているマールで、どうやら村を訪ねてきた人間に対応しているようだ。

彼は単純な好奇心から、そちらに向かって客の顔を見ようとした。しかし次の瞬間、稲妻に打たれたように足を竦ませる。

その客人は、皺一つ無い黒服を影のように着こなし、彫像の如く背を垂直に伸ばしている。

少年の脳裏に一瞬間光が走る。次に背中を走る怖気。本能が逃げると囁いた。けれども足は木の根のように地面に張り付く。

やがて客人は、キリアに気付くと片手を上げ、気軽な調子で言った。

「おお、我が朋友^{らいはる}よ、久方振りですな」

キリアの声にならない絶叫は、村を越え森を揺らし草原の果てまで響いたとか響かなかったとか。

なんとかファイと鐘を元通り鐘楼に吊るした後、少女は寺院の尖塔が見えなくなつて呼吸困難に陥る一步手前まで走り切り、傍の水桶の隣に座り込んだ。途中で何度も転んだので、膝当てに隠れた皮膚に渋い痛みがよぎる。

重い鐘を二人きりで持ち上げるには、彼女の筋力は脆弱だった。緊張から解けぬまま妙に硬直している腕の筋肉は、明日辺りに痛みを発しているだろうことが容易に予測出来た。

——何をしているのだろっ、自分は。

「ああもう、わたしの馬鹿！　いくじなし！　のろま！　ぐず！　虫けら！　何しに来たのよ、この村まで」

自分の桜色の頭をぽかぽこ殴りながら、体を縮めて青空を見上げる。

蒼穹の美しさが目に沁みて、涙がじんわりと滲んだ。慌ててそれを拭き取り、大きく肩を上下させて息を整えると、思い出が頭の中で閃光の様に閃いた。

のろま、ぐず、ぬけさく、うつけもの、うしちち。

何時も投げかけられる、冷たい視線。言葉は刃のように彼女を傷付け、追いやった。

誇り高い周囲の少女達は常に美しく高慢で、優れていた。そんな中に一人放り込まれた自分は、まるで孔雀の群れに紛れ込んだドブネズミ。いや芋虫。鋭い爪に踏み裂かれながら、啄ばまれないように無様に逃げ続ける。

今回だつてこうやって逃げて来ている。

逃げる事から逃れる為に、この村までやって来た。

しかしそれでさえ、本来の目的を果たすには押しが一步も二歩も足りず、周りに流されては遠い岸边まで流される。意志と勇気というものが、決定的に足りないのだ。

「そうよ、頑張るの。わたしは絶対、変わってみせる……芋虫だつて、いつかは蝶々になるの！」

そして拳を握り締めてからちよつと考え、蝶々は言い過ぎだなあ、蛾でいいや、と訂正してから立ち上がる。服に付いた土埃を払い、あの聖女の事を思い出した。

明るい色の服がとても良く似合う、可愛い女の子。今はまだ幼い面影が残っているけれども、あつという間に美しい孔雀の羽を広げるのだらう。じつとりと苔の生えた用水路が似合う自分と比べると、その愛に満ちた何一つ翳りの無い輝きは余りに強い。

「いいな……。わたしもあんな風に、皆に好かれる素敵なお女の子に生まれたかったな」

それはとても、適わぬ願いだけれども。

水桶に寄り掛かりながら、少女はぼんやりと春の風に吹かれた。

「ごめんね、聖女さん。わたしは貴女を、必ず——」

そう口の中で呟いた時、異様な気配が家の反対側から伝わってきた。少女は怪訝に思い、水桶から離れて壁から顔を出し向こうを見る。そこは村の中央を走る路で、宿屋に行くにも村の最奥にある聖女の自宅に行くにも、ここを通ることになっていた。彼女はここに来て既に三日程経つので、一番馴染みのある路と言えるだらう。

その路の真ん中で、大人達と一人の子供がなにやら大騒ぎをしている。

少し首を傾げて様子を伺っていたが、少年が余りに派手な反応を返すのが面白くて、つい近くまで寄って行った。

「出たああああ!!」

キリアの絶叫に顔を顰める事もなく、無遠慮に突き出された人差し指を流麗な動作で払いのけると、黒服の人間は僅かに目を細めた。黄橡色の瞳はキリアを見下ろして、品定めをするような光が宿る。

「相変わらずちびっこいですな。夜寝る前に暖めたミルクを飲むと良いでしょう。嫌と言う程伸びること請け合いですが伸びなくても

わたくしの所為ではありませんのでこの助言を逆恨みすることの無いようお願い申し上げます」

「意味わかんねえよ、ていうか失礼な奴だな！ 何だよ何の用だよ、言っとくけど術合戦なんかしないからな！」

十二分に相手との距離を置き、裏返った声で叫ぶキリアに、マールが呆れたように諫める。

「こら坊主、領主さんとの元執事様だぞ。失礼な事を言ってるのはお前の方だろうが」

「宜しいのです、副村長殿」

ばんばんとマールに頭を叩かれながら、キリアは眉を顰めた。

「元？」

すると執事は儚げな薄い笑みを浮かべ、遠くを眺めて言う。

「所詮わたくしは主も持たぬ野良執事。暖かな食卓をドアの隙間から覗き見しては殺人事件の証人になった上に自伝を出すという高邁な夢は怪馬の咆哮と共に露と消えたのでございます」

ぎくりとキリアは肩を揺らした。目を泳がせて在らぬ方向を見るが、視界の端で執事が自分をあからさまに凝視し始めたが映り、頬を痙攣させる。

「まあ、そういう訳ですので、求職中です。如何でしょう、副村長殿」

いかがつて言われてもなあ、とマールは困惑したように顎を掻いた。勿論、内心若い者が来るのは大歓迎であるが穀潰しでは困るのだ。

「領主の館が壊れたのはお気の毒だが、執事、なあ……。何か特技でも？ 例えば畑仕事とか建築とか調理とか子作りとか」

「そ、そうだよこの村に文系も術系も必要無いんだよ。腕つぶしの弱い優男はとつとと帰れ——って子作りって何だよ！」

これぞ予定調和、とばかりにマールの胸に平手打ちをするキリアを無視し、執事は続ける。

「失敬な。わたくしは執事学校の中の執事学校、王立白薔薇執事学

校を卒業したエリートですぞ。紅茶に掃除に諸外国語、数学理文学政治学法学帝王学権謀術数馬術占術弓術武術冥魔術冠婚葬祭庭の手入れ人前で上がらない方法ラブレターの書き方に嫌な客の追い返し方、嫌な霊の追い払い方も一通り学んでおりますし資格もあります。ちなみに先日国内執事番付では八番目にエントリーされました」

「なんて無駄な知識……」

キリアはぼかんと口を開け、その話が本当ならば英才教育ばかりに知識技能を叩き込まれたであろう文武両道の人間を見つめた。しかし、とてもそうは見えない。細い体は武術など嗜んでいるには随分と華奢な上、背も平均的な男性よりもやや低い。背中に届く髪を後ろで一つに束ねている所も女々しくて厭だ。ただし顔は良い。温和な香りのカイクとは対照的な、鋭利な匂いのするハンサムっぷりだ。キリアは執事が一層嫌いになった。

「ちなみに都立赤薔薇執事学校というのもございまして、我が白薔薇校と共に執事界の竜虎と呼ばれております。五十年近くに渡る両者の軋轢は薔薇戦争と呼ばれ」

延々と蘊蓄を垂れ始めた執事を無視し、副村長と通りすがりの羊飼いの男が相談を始めた。

「いくら氷の術が凄くても、ここじゃ役に立たねえ。畑仕事だっておれのほうがよっぽど上手いぜ」

鼻の穴を広げ、自慢げに言う少年の肩に下がった籠の中身を注視しながら、執事は口を噤んだ。ややあつて、「いつでもどこでもかき氷を」と返す。キリアは口を引き攣らせた。

めちゃくちゃ便利だ。

更に、「冬でなくても池をスケート場に」と続けられ、彼の心は誘惑へと大きく揺り動かされる。駄目だ。これ以上、子供にとって魅力的な提案をされては、彼は許してしまう。執事を村の一員として受け入れる事を、マール達に笑顔で頼んでしまう。

（駄目だ、負けるな！　こんな殺人未遂エセエリート、村に必要な

い！ ああでもかき氷があ、砂糖とマカプの汁かけると美味しいんだよなあ是非夏にも食べてみたいなあ、もういいや、ウェルカムかき氷）

一呼吸未満の懊悩の後、キリアはにこりと笑顔を作った。

そしてマーブルに向けて言葉を発さんとするその瞬間、騒がしい男が輪の中に飛び込んできた。ファイだ。入れ替わりに、羊飼いが去る。

キリアは我に返り、慌てて顔を引き締めて飛び退った。執事はそんな少年の様子を見て、小さく舌打ちをする。

（しまった罠だったか！ 危ないところだったぜ！）

一筋の汗が頬を伝い、薄い笑みが浮かぶ。二人の視線が火花を散らす。そんな緊迫した戦場は、例の小でぶのうるさい声にも掻き乱されることなく展開された。

「何、また新キャラね？ 料理出来る？ なら早速ウチに」

「待ちな、ファイ。若手は村の共有財産だ。勝手に決めて貰っちゃ困る」

どれだけ鋭く嗜めても、赤や黄やの派手な格好をしている為に貫禄は半減する。それでも副村長のその言葉に、ファイは言葉を沈めて体温を下げた。

誰がどこでどんな労働に従事しているか、村内会は全て把握しなければならぬという決まりがある。それを見て、村の機能として不都合が生じる場合は、マーブルらが勧告して異動させるのだ。先程の件のように、いくらバーババ亭や九里金豚がカイムを勧誘しようとも、最終的な決定権は本人とマーブルにある。

ファイは慌てて、カイムの身元は自分にあるという事を先手を打って主張しようとした。

「勝手にじゃないよ、あのカイム君だってウチに来るって言うてくれるね。ガリーナを屋敷まで遣わしたから、より確実ね。若い娘に頼まれたら誰だってウンと言うよ、だから彼はウチのものね。そっちのお兄さんはどうか知らないけど」

大いに勘違いをしている。

しかしマールは彼の言葉の、別の話題に興味を示したようだった。

「そついや、カームはどうしてる？」

「さあ。ここ数日外に出てないみたいよ。しかも最近、あの屋敷から不気味な唸り声が」

「……あー、うん、やつぱりな。……じゃ、日の高いうちに青年団に救出してもらうか。やつぱ捌けねえなあ、あの幽霊屋敷は」

途端、見えない刃で執事と殺陣を繰り広げていたキリアが顔を上げて眉を吊り上げた。

嫌な予感がする。

知っている、このパターンを。哀しい事に、彼は誰よりもよく知っている。

「なあ、もしかしてだけどさ。カームの兄ちゃん、幽霊屋敷に住んでんのかな。そんでもしかしてだけどさ、ガリはそこに独りで行ったのかな。——いや、いい、何も言わないでくれ。ちょっと待ってくれ。殺しそうだ」

キリアは蹲ってこめかみを両手で押さえる。

何故こうも毎回同じパターンであのバカは簡単に虎の穴にスキップで飛び込むような事をするのだろう、ああそうかバカだからか、と痙攣が止まらない瞼を強く閉じて口を歪める。どこかの血管が切れる音がした。

「幽霊なんて噂ね。大丈夫、すぐ帰ってくるよ」

「おっさんのその言葉が如何に信頼出来ないか、おれはよおおく知ってるからな」

地の底から這い出る節足動物のような声に、流石のファイもその言葉の意味が理解出来ぬまま黙り込む。マールも、ばつが悪そうに手櫛で白髪を梳かした。

「分かった、分かった。すぐ青年団に連絡するから」

「あいやお待ちを」

涼やかな声が響く。

見ると、執事が片手を軽く挙げて三人を眺めていた。些細な動作も麗しげで、それがまたキリアの癪に障る。

「その役目、わたくしにお任せ頂けませんか。上手くいった暁には、わたくしを村の執事として雇ってくださるという条件で」

「あんたが？ いや、事は一刻を争う感じっばいからな、あんたを試す余裕は無い」

お忘れですか、と執事は眼鏡を押し上げ少し笑った。

「私が白薔薇出身の国内八位のエリートだということを。悪霊退治も嗜んでいると申し上げたはず——貴女も聞かれましたね？ そこで立ち聞きしているお嬢さん」

え、と小さな驚愕を表す声がした。

三人は一斉に執事の指差す先を見た。

そこには、フライパンを大事そうに抱えて佇んでいる桜色の髪の少女がいた。相変わらず挙動不審で、全員の注目を一身に浴びた事に混乱を極めている様子だ。

「ああ、鐘を上げるの手伝ってくれた子ね。三四日前にこの村に來たって言ってたよ」

「ふ、ただの客人ではございませんな。体脂肪や原色やちびっこの目は誤魔化せても、このわたくしの目は誤魔化せません。——貴女のその花と星をあしらったレグレット、王都聖教会の巫かんなぎのものです
ね」

青空に高らかに響く執事の声。

びくりと肩を震わせ、少女は柳眉を下げて言葉に詰まった。

その間隙に、大人達は怒涛の勢いで彼女に迫る。

「み、巫女さんだったの？ さすが聖教会ね、地獄耳よ！ 訴え出る前に助けに来てくれるなんて。早速除霊をお願いね！」

「え、あ、あの、いえ」

「巫女殿、わたくしはライバルがいてこそ燃えるタイプですからご安心を。この際、協力して幽霊屋敷を綺麗な屋敷にしようではあり

ませんか」

「そ、あの、ど、え」

「で、巫女さんなんだよな？」

「……はいそうです。悪い悪霊をやっつけるために来ました」

涙目で何度も何度も頷く少女の肩をばんばん叩きながら喜ぶ大人を横目に、少年は歩き始めた。

幽霊となればもう駄目である。プロに任せるしかない。

自分に出来ることは、宿屋にいるミミと世間話でもしながらおやつを食べつつガリーナ達の安全を祈るだけだ。その際、バーバババ亭に寄って芋虫を三百エンスで売ることにする。これで二人分のおやつは余裕で確保出来る計算だった。

口笛を吹き鳴らしながら、大人って凄いなあ、と空を仰いだ。

「ああ本当に何してるんだろ、わたし。ほんともう馬鹿。ゴミ。屑」先に立って歩く執事の後ろを、足を引き摺るようにして着いて行きながら、少女は幽鬼のような顔をしてぶつぶつと呟いた。執事は、時折振り向いては肩越しに少女の様子を見、彼女の被っているものに視線を送っては前を向く。

指摘された通り、少女は聖教会の巫女だった。それは本当。それだけが本当。

幽霊屋敷の話なんてこれっぽっちも存じ上げなかった上に、巫女だから除霊が出来るなんてそんな短絡的な話はないと思う。率直に言えば、幽霊なんて死ぬほど嫌いだ。勿論、除霊など出来るはずもない。

少女がこの村に来たのは、全く別の理由からだ。

「でも今更言えない……いつもいつもそう、気が付くと周りが勝手に……ううん、わたしが流されるんだわ。流木じゃあるまいし。ほんとともう阿呆。優柔不断」

真下を向いてぶつぶつぶつぶつとりとめなく独り言を続ける少女は、いつしか突然立ち止まった執事の背中に思い切りぶつかってもんどりうって転んだ拍子に三回転して上手い具合に正座して止まった。背後を振り返った執事は、何故かきちんと手を揃えてこちらに向かい正座した鍋を被った巫女に眉を上げながらも、何も言わずに道の先を指し示した。

「どうやらアレが噂の屋敷のようです。なかなか厳しい建物ですな」鬱蒼とした両脇を固める木々の合間に見える、強固な作りの石の建物。

この村にしては華美な装飾のそれは、一体何年放置されてきたのかと眉を顰める程に汚れていた。

「これはまたなかなか」

執事がそう呟くが、少女は何も言えずにただ震えてフライパンを握り締めるだけだった。先程までの麗かな天気はどこへやら、乾いた冷たい風と俄かに溢れ出す曇天が屋敷を覆いつくし、不吉な鳥の叫び声が辺りに響き渡る。

ごくりと喉を鳴らし、軽い足取りで進む執事の後をつかず離れずついて行く。

執事は正面玄関を通り過ぎ、庭に向かった。

「うひゃっ」

見えない誰かに髪をひっぱられ、少女は涙を堪えながら前を歩く人間の腕にしがみつく。体中を嫌な汗がつきまとい、それでも身体の芯から冷えるような空気。しかし執事は平然と、屋敷の裏にあった井戸に目を付けて歩み寄った。

「ひ、ひつじ《・・・》さん、ここに何か？」

「いえ、もしかしたらカイルマスターン殿は空腹か寝不足か何かその辺の理由で倒れているんじゃないかと思ひまして。杞憂でした」

腹が減って井戸に落ちる人間も珍しいんじゃないか、と巫女は思ったが、すぐに思考が凍結した。

ぽつかりと空いた井戸の中から、おびただしい数の青白い手が現れたのだ。

手はゆらゆらと藻のように揺らめき、二人においでおいでをしなからゆつくりと這い出してくる。

「うきやあああああ」

絶叫して尻餅を付く。逃げようにも足が動かない。

こんな恐怖は、いじめっこに路地裏まで追い掛け回された時以来だった。恐るべき冷気が足元に纏わりつき、しゃくりあげる。

手は肘の辺りまで露出させて這いずり出てきた。

その刹那、

ホワイトラバース
「趨走氷鎧！！」

凜と響いた声と共に、冷風と空気の軋む音が聞こえた。

執事の放った冥魔術が、手共々井戸を完全に氷で包み込んだのだ。

手は完全に凝固し、琥珀の中の虫よろしく氷漬けになる。

執事はその様子をまざまざと眺め、腰の抜けている少女を振り返った。

「こう、細かくて気味の悪いものほどつい注視してしまいませんか？　ボウフラとか毛虫の死体とか蛙の卵とか」

「し、し、し、しません……」

「そうですね、残念です。ところで矢張りこの屋敷は相当なものですよ。気合を入れて行かないと、我々もこの手の仲間入りをしてしまいかねません。ははは」

全く変わらない表情のままそう言い切ると、執事は未だ座り込んでいる少女の襟元を掴み上げて玄関へと向かった。引き摺られながらも、凝固した手の群れから目を放すことが出来ず、（あ、やっぱり注視しちゃう）と妙に冷静な頭で納得したが、それは混乱の極みの逃避であることは彼女自身よく解っていた。

「あの、なんで平気なんですか。手ですよ、手。ゆらゆらしてるんですよ。幽霊ですよ」

掠れ声で尋ねると、執事はもう一度抑揚無く笑う。

「毛深い男の筋肉質な足が何十本もゆらゆら出てくるよりはマシかと」

それはそうだ、と少女はかくかく首を振って納得した。

玄関前に戻つてくると、腐った大きな木の扉が眼前に現れた。二人は暫く無言でその扉を眺めていたが、やがてそつと取っ手に手をかけ引く。勿論それを実行したのは執事で、少女はその背中に隠れるようにして目を見開いて中を覗き込んだ。

中は外よりも冷たく、埃だか霧だか分からないような白い靄ががすかに沈殿している。

「ひ、ひ、ひつじさん、絶対離れないでくださいね、絶対ですよ」

執事は凍らせた表情のままに廊下の最奥を見据え、部屋の窓から差し込む光すら殆ど届かない暗闇の中をすうと半透明の膝から下が歩いて通り過ぎるのを認めると、大きく頷いた。そして取っ手にか

けた手に力を入れ、

「わたくしは、後方支援ということで」

言い置くや否や、少女を中へ蹴っ倒して風のように扉を閉めた。

「ふぎゃああ!？ ひつじさんひつじさんひつじさん! 無理です無理です無理ああ駄目駄目ほんと駄目ですつてば失禁しますよああぎゃああああ」

唐突に訪れた闇に動転し、頑なに閉ざされた扉に縋りついて泣き喚きながら叩きまくるが、相手はうんともすんとも言わない。どうやらあっさりこの場を去ってしまったようだ。

「やだあああもう死ぬううう」

少女は涙と鼻水で顔をくしゃくしゃに歪め、暗闇と冷氣に包まれたままその場に座り込んだ。

ひとしきり恐怖に任せて顔から水分を放出した後、呼んでもいない冷静がすり足でやって来た。

暗い家の廊下の影はおぼろげながらその輪郭を彼女の眼前に現し始め、地の底から聞こえるような子供の軽い笑い声と獣の唸り声が彼方から聞こえた時、少女はフライパンを抱きしめたまま意識を深淵へと突き落とした。

失禁じゃなくて失神でよかった、と何やら妙に塩辛い涙を味わいつつ少女のように小さく微笑みながら。

それから時は少し前に遡る。

朱色の聖服を着た聖女は、屋敷の前にして佇んでいた。否、動けずにいた。

相当古い物件よろしく、石造りの建物には苔や蔦がびっしりと繁茂し、木戸は腐って落ちていた。外はこんなにも明るい春の陽光に輝くと言うのに、屋敷の周囲だけ暗澹たる空気が纏わりついている。うつすらと霧がかかっているようにすら見えた。

ごくりと喉を鳴らすと、口を開ける。

何を言おうか、考える前に行動に移したので、そのまま暫く硬直

して思考を巡らせる。そして思い切りよく、ただし声は小さく、呼びかけた。

「カーイムさん、あーそびーましょー」

余程混乱しているらしい事が自分でも解る。

十年近く退行してしまった。

「いやいやいや違います。幼き日の幻影に惑わされてはいけません。私はもう十七のおしりの小さなきゅーとな大人のナオンなんですから。遊びましょう、じゃなくて遊んでかない？とかが良いんじゃないかと。聖騎士さんも五巻でこの手の女性に好意を抱いていましたし」

ぶつぶつ言いながらその場でぐるぐる歩き回っていると、館の奥から咆哮が聞こえた。

ぴたりと足を止め硬直してその声を聞くと、それは悪霊の声とも獣の声ともつかない、敵意をあらわにした恐ろしい響きを持つていることが嫌でも解った。

顔面蒼白で館を凝視していると、暫くの間後に再び咆哮が響く。その瞬間、幼い頃の怖ろしい思い出がありありと蘇ってきた。何の為かは解らない、誰かと遊びに来たのかもしれない。かくれんぼをしようとしたのか、単なる肝試しか――とにかくここに来た。

黒くて大きくて怖いのが物陰から自分を見ていた。

動く事も出来なくなつてしゃがみ込んでいると、沢山の白い手が現れて、波の様な哄笑が響いて。

気が付くと月明かりの下を大人の手を引かれて歩いていた。振り返り、黒い館は遙か彼方で小さく佇んでいたのを見て、その時に初めて自分はある幽霊屋敷から逃げ出せたのだと気付いたのだ。

と、いうことを、今の今になって素晴らしいタイミングで思い出してみた。まるで無くしたパズルのピースを肥溜めの中で見つけた気分だ。

「……ああ……普段は必要な事すら忘れる癖に、どうしてこう……どうでもいいことを……」

背を這い上がる根源的な慄きに眉を顰めつつ、腰の引けた体を震わせる。薄い霧が朱色のスカートに纏わりつき、まるで生き物のようにうねっては溶け揺れては消える。体の芯から凍るような冷たさも益々強くなってきた。

しかし、それでもガリーナは退かなかった。

恐怖のために半ば自暴自棄になっていた所為でもあるが、カイクに会って話をする事が現在の彼女の人生最大の目標になっていたからである。最大限努力して嫌われるならまだマシだ。努力無くして諦めるのは絶対に嫌だった。

「ええい、死んで花実が咲くものか！ 従ってしぼんでる貴方がたは怖くありません、お邪魔しますよこんにちは！」

二階の窓から顔を覗かせている黒い影のような顔に力強く手を振って、鼻息荒く扉へと突進する。より強くなる冷気が足元を這いずり上がり、その冷たさに紛れて足首を掴もうとする見えない誰かの手を蹴り上げながら館の内部へ踏み込んだ。

暗い。

「あ、蝋燭忘れた」

そう呟いた瞬間、背後の扉が勢い良く閉まる。

夜のような闇が訪れ、暫くガリーナは立ったまま微動だにしなかった。腰が抜けたのである。

長い間の後、そろそろと後ろ手に扉の取っ手を持ってがたがたと動かし、

「やっぱりねー」

軽い声で乾いた笑いを上げながら何時までも開かない扉をがたがたがたがた鳴らしていた。

やがて目が闇に慣れてくると、荒れた玄関の様子が明らかになる。戸板から漏れる僅かな外の光のお陰で、完全な暗闇にはならなかったのだ。屋敷は矢張り大きく、アルプー領主の壮大で華美な作りとまでは行かずとも、ホールが存在する上に螺旋状のステアケースが上階へと導いている。床も大理石で菱形の模様を描いていた。

この屋敷を本気で修築したらとんでもなく美しく無駄なものになるだろう、と考えながら、ガリーナは取り敢えず前に進む事にした。後ろに退けないのだから仕方が無い。

吹き抜ける隙間風に身を震わせ、小さな声で言う。

「カイルさん、いますか」

「なあに」

頭のすぐ後ろで声がした。思わず立ち止まり、振り返らずに目を強く閉じる。

「わ、私の知ってるカイルさんは、そんな繊細な少年合唱団みたいな声をしていません」

小さな含み笑いへと姿を変え、背後の声は廊下の奥へと消えて行った。

耳に痛い程の沈黙の中を、体を凝固させて目を閉じている。こんな恐怖はかつて無い。怖さを通り越してどこか達観してしまうほどの混乱に心を奪われないように、ガリーナは胸の前で強く両手を握り締めた。

帰りたい、と心底思う。もうカイルなんかどうでもいいじゃないか。嫌われたままでも構わないだろう。この恐怖に勝る恐ろしさを、全体彼がもたらしてくれるとでも言うのだろうか？

「……違います、それは違います」

カイルがくれるのは、きっと恐怖ではない。

安堵だ。

安堵を求めるからこそ、ガリーナは今ここに居るのだ。この幽霊屋敷に。

ざわざわと遠い声が聞こえた。咄嗟に目を開けると、廊下の曲がり角の向こうから、青白い波のようなものが這い出してきた。声は何かを呟き、笑い、さざめき、波と同調して揺れる。

思わず身を引いたその瞬間、津波となって襲い掛かった。

「うひゃああ！」

我ながらも少し可愛らしい悲鳴が出ないものかと青い炎に揉み

くちやにされながら思う。笑う波は彼女の手や足や髪を掴み、廊下を風のような速さで押し流れてゆく。

「ちよ、ちよ、ま、待つ」

余りの冷たさと衝撃に目を回しながらも、ガリーナの怖ろしい速度で移動する視界はある一点を捉えていた。ぽっかりと穴の開いた書斎らしき部屋。たった一瞬だけであつたはずなのに、眼窩の奥に焼きついて離れない。

あそこの古い机の下で、幼い聖女は座り込んでいたのだ。

黒くて大きい、怖い何かから隠れる為に――。

悲鳴が口から漏れる直前、獣の唸り声がした。

青白い波が怯むのが気配で伝わり、次の瞬間、突然どこから現れた黒い獣が彼女目掛けて咆哮を上げながら突進して来る。

その大きな音響だけを脳裏に残し、ガリーナは自分の体が深い闇へ沈んで行く感覚を味わっていた。

衝撃らしい衝撃は無かった。

ガリーナは床穴を真上に見上げ、地面に横たわっている。

獣の唸り声に波が怯んだ瞬間、床板が抜けて下へと落ちたのだ。

石で出来ている建物も、場所によっては改築を重ねて木と緋い交ぜの造りをしている部分もあったらしい。

もうもうと上がる土埃も気配では感知できるものの、地上よりもより一層暗いここでは見る事が出来ない。咳き込みながら口と鼻を両手で庇い、周囲を見渡した。

「けほっ……うえ埃舐めちゃった、ぺっぺっ」

頭上の穴からはほんの僅かな光が漏れるだけで、ガリーナのいる地下には漆黒の闇だけが支配している。どうやらここは地下貯蔵庫か倉庫らしいが、自分の指先さえ目視出来ない状況ではどうとも言えない。

いつの間にかあの青い波も笑い声も冷気も消えている。

「ああ怖かった……。あの黒い獣もいなくなっちゃったみたいですね、良かった」

盛大に胸を撫で下ろすガリーナの下で、もぞりと何かが動いた。

「……………」

硬直する。

そろそろと自分が倒れこんでいるその真下の物体に手を這わせる。柔らかい。温かい。ふさふさ。

——ふさふさ。

「いた——！！」

瞬時に跳ね起き、飛び退き、がこん、と何かに頭をぶつけて目の前に星を散らしてもう一度倒れる。

倒れた先には滑らかな毛皮。柔らかく尖った二つの耳らしきものに触れた時、その獣は大きな狼か犬らしい形をしていることが判っ

た。判ったところでどうだという話だ。

密閉された土蔵のような地下室で、自分を襲おうとする獣と二人きりである事に変わりはない。

「ちよつと待ってください、卑怯じゃないですか。貴方は目が良いのでしょうか、私なんか自分のこの指が何本あるかも判らないんですよ。ええ、五本ですか。それくらい知ってますよ。でも見えなぃんです！ フェアじゃないです、やるならおてんと様の下でガチンコしようじゃありませんか！」

漆黒の闇の中でファイティングポーズを取り、震える声でなんとか啖呵を切った。しかし指が何本あるかも判らないのだから、闇の溶け込むような黒色の獣がどこにいるかなどもっと判らない。明後日の方向を睨んでいたと気付いたのは、自分の右斜め前あたりで爪が石の地面にぶつかる小さな音がしたからだった。

ちやつ、ちやつ、と掠れるように鳴る音でその爪の鋭さを思ったが、獣はどうやらガリーナから離れていく。それから少し離れた所から壁をがりがり引つ掻く音がしたかと思うと、再び地面に爪をぶつけて歩き出す。そうやってガリーナを中心に部屋をぐるりと一周した頃、溜息が聞こえた。

獣も溜息を吐くのだ。

それきり何の音も聞こえなくなる。爪の音も、吐息も。

ガリーナはいきり立った体を弛緩させ、爪先立ちを止めると胸元で構えていた腕を下ろした。

「あの、勝負はやっぱり外でということでしょうか？」

獣は答えない。代わりに再び溜息の様な吐息を漏らし、この場所から動かないことを示すように横たわったようだった。

否、動かないのではなく、動けないのだ。

貯蔵庫の天井の真ん中に開いた穴はまるで鼠返しのように、その上ガリーナと獣が落ちた衝撃で中の大きながらくた達が倒れ外への出入り口を塞いでしまい、部屋は袋小路となった。獣はそれを確認し、諦めたのか思案しているのか、座り込んでしまったのだ。

しかしガリーナはそこまで考えていない。ただ獣は怖いし真の闇で動けないし、あと眠いし疲れたしお腹も空いたし探し人には会えないしの絶望と恐怖と共にその場にへたり込んだだけだった。

「フェアな狼さんで良かったです……でも私もう駄目です、なんかどんどん暗くなってきた……。多分ここで死んじゃうんでしようね、私。寂しいよう、おかあさん……」

そう呟いて周囲を見回し目を凝らす。閉じても開けても同じ漆黒だ。

「ああ、思えば短い人生だったなあ。皆からは馬鹿だと言われ、まあそれはそうだから良いんですけど、親元を離れて一人暮らし早や十数年。学校にも行っちゃいけないし友達もあんまりいないし勿論恋人だって——ああ、やだ恋人だって！ 私ったらはしたない、聖女なんだから」

地面に横たわり、走馬灯を見ているガリーナの言葉は夢現のように儚げだった。

獣は身じろぎせずに暗闇の中でそんな少女の姿を凝視している。

「そういえば私が子供の頃ここで会った黒くて怖い、貴方なんですか？ 凄く怖かったんですから、あれから暫く一人で眠れなかつたくらい。何か言ってた様な気がしますけど——こんなわんこみたいな姿だったかしら？ 私、本当は狼さん好きなんですよ。今度空の下でお顔を見せて下さいね」

あらやだここで死ぬんじゃない、私ったら馬鹿ね、と小さく笑って顔を覆う。

獣はじつとしている。一人で喋る少女の饒舌に戸惑っているようだった。

「次……次生まれる時は……普通の女の子がいいな。村の学校に行つて、税金もちやんと納めて、お母さんと羊を追いかけて、ファイさんの油っこい料理を食べて、意地っぱりなキリアの面倒をみて。私が大きくなるまで、皆は私の事を覚えてくれてるかしら。ああ、それから——カイルさんに謝らなきゃ」

それきり黙り込む。

ガリーナは仰向けで顔を覆い、闇に体を溶かす感覚を噛み締めながら、言葉にならない無念に心を奪われていた。こんな廃屋の奥底に聖女が倒れているなんて、一体誰が気付くことだろう。誰にも見止められず、永遠の夜の中でこの身は朽ちてゆくのだ。

遣り残した事など山ほどある。遣り遂げた事を数える方がずっと早い。桃色の服だって結局は一針も入れず寝台の上に放置してあるし、大好きな聖騎士シリーズの新刊だって読みそびれている。ライバルであり恋敵である唐辛子色の騎士との決闘の続きが気になって仕方が無いというのに、この間行商が来た時にけちらず買っておけば良かった。

そんな細々とした曖昧な日常にはもう戻れない。無念を地上に残したまま、自分は一人で死んでゆく。死体は獣が食べてくれるだろう、別に今となつては怖くもなんともない。

怖いのは、やはり最大の無念である、カイムの怒りを解けなかったことだ。

カイムに嫌われたままその理由も解らぬままに死んでゆく、この無常といったら無い――。

そこでガリーナは目を見開き上体を起こした。「カイム？」
そして思い出した。

ここが一体、誰の屋敷であるのかということ。

「カ、カイムさ――ん！！ここにいます、助けてくださあーい！！」

駆け足でやって来た希望と焦慮に急かされてそう叫んだその時、室内に小さな風が吹いた気がした。地下の冷風ではなく、霊の波でもない、春の風が。そして、

「知ってるよ」

呆れたような、少し機嫌の悪い声音の言葉。

その声こそ、彼女をこの悪夢のような幽霊屋敷に突入たらしめた青年のものだった。ガリーナは思わず振り返る。

何よりも驚くべきことは、声が彼女のすぐ後ろで聞こえたことだったのだ。

何度か石を叩き合わせる音がした後、か細い猫の目のような灯が点った。埃を被ったランプがその灯を納め、そしてそのランプが見知った男の手の中に納まっていることの気付くと、ガリーナは飛び上がって口元を覆った。

一体何時の間にここに來たのだろうか、カイムは橙色の灯を漆黒の瞳に反射させてガリーナを見つめている。

「カイムさん！」

全てを吹き消す何ともいえない安堵に任せて彼の元へ走り寄ろうとした時、「待って！」とカイムが慌てたように空いていた手を挙げてガリーナを制した。ぴたりと不自然な姿勢のままで静止した少女は、目を丸くして相手を凝視する。

「そこから動かないで。それ以上俺に近づいたら——」

少し間を置いてから「怒るよ」と続ける。

「あ……はい、すみません……。私、そんなに嫌われてたんですね

……ごめんなさい」

「いや、その」

ずび、と鼻をすすってそれでも無理矢理に笑顔を作った。

「でも助けに来てくれて嬉しいです！ 本当に心細くて、私とあの狼さんだけじゃ……あら？」

獣はいつしか消えていた。

仄かな光に姿を現す雑然とした部屋の内部は思ったよりも小さく、怖ろしいものでもない。闇と共に、夜の色をした獣も姿を消していた。

ガリーナは獣に対して最初に抱いていた恐怖も忘れ、不思議に思うと同時に残念だとも思う。白昼の元でその姿かたちを見てみたいと本心から思っていたのだ。

それに、今思えばあの獣は敵ではなかったのかもしれない。あの

狼の声で霊の波は姿を消した。もしかしたらあれはガリーナに対する威嚇なのではなく、霊に対する威嚇だったのではないだろうか。昔から、霊は獣に弱いと言うのではないか。

「昔から狼や犬の声に幽霊はたじろぐと聞くけどね。どこから迷い込んだはぐれじゃないか」

思わず青年の顔をまじまじと見る。今まさに考えていた事を彼が口にしたからだ。

その時、ふとカイムの目と髪が深い夜の色だということに気付いた。

「何？」

「いえ、なんでもないです」

黙っていることにした。あの獣の溜息がカイムの溜息に似ているだなんて言ったら、馬鹿どころか気狂い呼ばわりされかねない。

「それより、カイムさんに謝らなくちゃいけないんです。私が寝ぼけたせいでカイムさんにあんな大怪我をさせちゃって、本当にごめんなさい。死ぬまでごめんなさい」

綺麗に地面に膝をついて首を垂れる少女に、カイムは額の絆創膏を弄りながら困ったように同じく地面に座り込んだ。

「だからさ、もう良いってば。傷だってすぐに治るし、君はこれで百何回も謝ってるじゃないか。俺が目覚ましてすぐに許したはずだけど」

「今ので百六十三回です」

「うん、そうか。いやだから俺が言いたいのは、君はもう謝る必要は無いと——」

「呼んでくれません」

へ、とカイムは間の抜けた顔で離れた場所に座る少女の真っ直ぐな瞳を見た。

「名前で呼んでくれません。近づいてくれません。だからカイムさんは私を許してくれてません。私は出来れば許して貰いたいですけれど、それが無理なら仕方が無いと思います。でも、本当の事だけ

はどうしても知りたいんです。どうしてカイクさんは、私が近づくと怒るんですか？」

きつと強い視線を相手に送りながら、ガリーナは腹に力を込める。ついに言ってしまった。怖くて怖くて聞けなかった、答えの解りきった問い。

「君が嫌いだから、」この一言を聞くのが死よりも怖ろしかった。しかしつい最近、何も聞かずに蓋をしたまま生きていく方がずっと怖ろしいことに気付いた。

カイクは困ったように見つめ返してくる。彼は折に触れて困惑したような表情を作る。それが癖なのか、それとも本当に困っているのかは解らなかったが、今は後者であることは容易に理解出来た。カイクが意を決したように口を開く。

ガリーナはそれを聞き逃すまいと体を固まらせた。どんなに残酷な言葉が出てこようと、決して泣くまいと——そんなみすばらしい真似だけはするまいと、聖女の名に誓って。

「コロン」

——しかし、その言葉は余りに意外だった。

「……………はい？」

目と口を大きく開け、間抜けな甲高い声で返したら、カイクはばつの悪そうな顔で俯いた。そして開き直ったか腹を括ったか、明瞭とした声音で断言する。

「君の持っていたコロン、あれがその——嫌いだったんだ」

コロン、と鸚鵡返しに呟いて聖女は暫く動きを止めた。

二呼吸、三呼吸、ゆうに五回は息を吸って吐いた頃、漸く彼の指し示す奇天烈な言葉が何のことか解った気がした。

先程までの張り詰めた覚悟はどこへやら、太陽を浴びて眠る弛緩しきった猫の尻尾を弄るのに似た感覚で尋ねる。

「コロンって……ミミさんがくれたあれでしょうか？ あれ、プー

さんちで失くしちゃったみたいなんですけど……え、それだけですか？」

なんだ失くしてたのか、と呟くと、カームは心から安堵したように頷いた。

「うん、まあそんな感じ」

「コロンだけ？」

「そう」

「匂いが？」

「駄目なんだ」

「ガリの聖女は？」

「どちらかと言うと好き」

しじまの中、ガリーナは座ったまま一歩分だけ前に膝を進めた。制止するかと思われた青年は、指先ひとつ動かさずにただ聖女を見ている。

「うえ」

「上？」

ガリーナの翡翠色の大きな瞳はみるみる潤み、そして両手で隠された。

「うえええええええん」

「な、なんで泣くんだった！？」

だって、としゃくり上げながら、

「嫌われてると……思っ……良かつ……おじいちゃ……」

「だ、だから違っ……言っ……てたじゃないか！ 君は知らないだろうけど、あのコロンには世にも怖ろしい効能があつて……ああ、言っちゃいけないんだ。とにかくあれの所為で近づけなかった、君に」

延々と泣き続けるガリーナにどう対応すれば良いか解らず、右往左往しながら、結局頭を撫でることしか出来なかった。

「嫌っても怒ってもいないよ、君を傷付けるつもりも無かつたんだ。コロンについて言えなかつたのはミミに口止めされて——はしたな

い子だと嫌われるからだとかで。だから泣かないで、ガリ……ーナ」
すると目に溜まった水滴をこしこしと手の甲で拭い、少女は矢庭に笑顔を見せた。相手は思わず顎を引いてその豹変ぶりに驚愕する。

「へへ」

「……何？」

「そう、ガリーナです。私の名前。そうそう」

湿った瞳で嬉しそうに何度も頷くガリーナを呆れたように眺め、変な子だな、と元料理長は呟くように言う。彼女が村で一番の馬鹿だと言われている理由が少し解った気がした。

「良かった、嫌われてなくて。今まで生きてきた中で一番嬉しいかもしれません」

ただし、馬鹿は馬鹿でも、馬鹿正直の方の馬鹿で――。

「そうだ、ところでカームさん。ここ暫くお屋敷から出て来なかったみたいですけど、大丈夫だったんですか？」

「うん、掃除にてんてこ舞いでね。特に修理が必要な所を確認して回ったり、残された荷物を整理したり。この穴も抜けそうだったから注意していた場所だったんだけど、まあ空いちちゃったから仕方ない。でもそれより一番大変なのが例の――」

その時、遙か彼方からカンカンと金属的な音が規則正しく鳴り響き、合間に震える呪詛のような言葉が挟まれるのが地下まで届いた。
「なんだ？」

カームが不審げな顔でぽつかりと穴の開いた天井を見上げる。上階の闇は相変わらずだったが、音と呪詛はどんどん大きくなり、こちらへと近づいてくる。まるで恨みを残して死んだ霊達が生者を冥府の穴蔵に引きずり込もうと蠢いているような呪いの声に、少女は緊張したように青年の隣に寄った。

そして呪詛と金属音が最高潮に高まった次の瞬間、

「ベギヤッ」

天井の穴から何かが落っこちてきてごろごろ転がって壁にぶつかり跳ね返ると上手い具合に正座して止まった。

呪詛と音は止んだ。落つてきたものの呻き声がそれらに取って代わる。

「あ、しょぼん玉の方！ どうしてここに？」

「あっ……」

降ってきた桜色の少女は小さな吐息を漏らすと、目を真ん丸にして二人を凝視した。そして、

「お、お、お取り込み中申し訳ありません！ ほんとに気の利かない小娘で、もう、えいこの、馬鹿っ死ねっ」

と持っていた銅製のフライパンで自分の頭をがんがんに叩き出す。

頭蓋を金属が殴りつける鈍い音は、二人が必死で止めるまで延々と地下倉庫に響き渡った。

大きなたんこぶを頭に乗せた桜色の少女は、時折つかえながら自分がマールブルらに捕まって執事に裏切られ泣きながらフライパンでリズムを取り陽気な歌を歌って自分を励ましつついつしか穴に落ちていた事をさめざめと語った。

カイルとガリーナは意味深に頷きながら、

「あれは歌だったのか」

と意外な事実には溜飲が下がるのか上がるのか分からぬ奇妙な心持ちになった。

「幽霊は怖いし出口は開かないしお兄さんは無事な上に暗がりで聖女さんといちゃいちゃしてるし、なんかもうわたしどうしたらいいか解りません……あ」

少女は座り込んだまま体をずりずりと百八十度回転させ、小さな声で続ける。

「わたしはあっち向いてますから、どうぞ存分にちちくりあってください……」

「なんだかなあ。この村には勘違いが大好きな人が多いみたいだ。で、結局のところ君は誰」

面倒くさそうに地面に足を投げ出したカイルが顎で少女を指し示す。相手はフライパンをぎゅうと抱え込んで、肩越しに躊躇するようにガリーナを見つめた。

「——え、いちゃいちゃなんてお洒落なことしてませんよ、しょぼん玉さん！」

「遅いね……反応が」

「だって想像が追いつかないような単語を出されたんですもの。いちゃいちゃって、こう……その……なんだかそんな退廃的で背徳的な語感じゃないですか。ところでちちくりって何ですか？」

「いちゃいちゃの上級語。人前でやったら怒られる」

「まあ、それはご愁傷様なことです。例えば猫の顔を赤く塗ったりファイさんの薄いカツラを取ったりすることですか？」

「ははは。君は可愛いなあ」

徹底的に噛み合わない背後の二人の緩い会話も耳を素通りする。

ごくりと喉を鳴らし、引き攣った頬で同僚の巫女たちの言葉を思い出した。

——弱虫、意気地無し。いつまで経っても間抜けなんだから。

——そうね、貴女には田舎の聖女あたりがお似合いよ。ああ、もしかしたらそれ以下かも。

——違うの？　なら証明して御覧なさいな。貴女が田舎の聖女よりも強いって。

強いに決まってる。

だって私は誇り高く清らかな聖教会の巫女なんだもの。

情けない弱い自分なんて嘘だ。今から変わる。

その為に休暇を利用して、自宅にあったフライパンを掴んでこの村まで飛んで来た。

聖女と勝負して、勝って——本当の自分に生まれ変わって、皆から認められてみせる！

「しょぼん玉さん？」

聖女は先程から黙り込んでいる少女に首を傾げてみせた。

震える小さな声で巫女は言葉を搾り出す。仄暗いランプの光に正面から向き直り、聖女の翠色の瞳を真っ直ぐに見る。

「わ……わたしは……自分が大嫌いです。意気地が無くて馬鹿で不器量だから居場所が無くて、皆には苛められて。でも……でも、認められたいんです、わたしも立派な一人の人間なんだって！　だからごめんなさいガリの聖女さん、何の恨みもありませんけど、わたしの薔薇色の未来の為に覚悟——！！」

「え？　え？」

振り返りざまにフライパンを高く掲げ、きょとんとしている聖女に叩きつける。

橙色の光芒に、鉄の縁がきらりと輝く。

調理用の凶器は宙を失踪し、ガリーナのヴェールの上から頭に激突——しなかった。

「……え」

フライパンを振りかぶったまま、巫女は啞然と闇色の中空を眺める。ガリーナも呆然としている。

そしてカイムの、「また出やがった」という嘆息を合図に、それはより一層形を成して部屋を飛び回り始めた。

青白い波のような炎が狂ったように舞い、足元から響くような子供の笑い声は段々大きくなり、やがて部屋を揺らす。

「ゆ、ゆ、ゆ」

「また出たあ……！」

カイムは座り込んだまま顎だけ上げて中空を眺めた。最早ともに取り合うつもりも無い様子だったが、反対に恐怖の極地にいる少女達は哄笑に震えて急いでカイムに擦り寄る。

「なるほどタダな訳だよ。こんな屋敷に十エンスでもついたら多分キレて壊してた」

小さく呟く言葉が何か妙に物騒なことを示唆していることに漠然と気付きつつ、巫女と聖女は涙目で最早人と同じ形を形成し終えた幽霊達を凝視することで精一杯だった。

それは少年の姿をしたものだった。

彼らの笑いと共に、小さな囁き声が部屋を満たす。

（女子がまた来たよ）

（本当、いない女子ばかり。男子がなかなか来ないんだもんねえ）

（あれ、この子十年前に追い返した子じゃない？ 女って執念深いよ、怖い怖い）

少しの間を置いて、ガリーナが彼らの指し示すのが自分であることに気付いて、「ごめんなさい」と呟く。

「謝らなくて良いよ、悪いのはこいつらなんだから。叩いても怒鳴

つてもすぐに復活して、鬱陶しいッたら無い。ゴキブリみたいなもんだよ、一匹見つけたら百匹はいる」

カイムの不機嫌な声に、少年は面白そうに笑った。彼らは繊細な相貌の、美しい少年達だった。

青白く光る体は向こうが透けて見えて、壁を背に佇む三人の鼻先に顔を近づけて吟味するように見つめる。

（不貞腐れちゃって、可愛い。それでこそ僕らが見込んだだけのことはあるってものさ）

（君が来た途端にあの煩わしい鐘の音は消えるし、今年は春から幸先が良いや）

「うるさい、俺はお前らみたいな脛毛も生え揃ってないようなガキと話す気は無いと何度言えば解るんだ。死んだから脳味噌までスカスカらしいな」

すると、右手にしがみ付いていた少女が震えながら言う。

「お兄さん、渋好みだったんですね……わたしはもうちょっと若い方がいいかな……や、わたしが良くても相手が嫌か、そうですね毛虫が偉そうなこと言ってごめんなさい」

「まあ、自分に自信を持つてください……貴女はとっても可愛い人ですよ」

君らも少し黙ってくれ、と真ん中でカイムが唸るように呟いた。

少年霊達は徐々にその数を増やし、やがて部屋の中空を二十人近く緩やかに浮遊し始める。その全てが短いパンツを穿き、小鹿のような白く細い足を惜しげもなく晒していた。

勇気を奮い立たせたガリーナが、一歩前に出て彼らを睨みつける。カイムの右手の袖を強く握り締めたまま。

「貴方達はどこのどなたですか？ この家はカイムさんの物です、挨拶もなしに我が物顔でうろろろするなんて無礼千万、私が許してもカイムさんが許しませんよ！ 名を名乗りなさい！」

「あつ、こら、ガリーナ！」

慌てたカイムがガリーナを制止するが、もう遅い。少年達はいち

ように嬉しそうな笑みで顔を見合わせると、突然一番前にいた霊が怒号を響かせた。

（整列！ 番号！）

他の霊達の怒号もそれに続く。

（壹！）

（貳！）

（参！）

びしりと背を伸ばし、青白い半透明の少年霊達は一人ずつ彼方を睨んで整列する。その迫力に思わず後退りしたガリーナは、カイムの袖をより強く握って縮み上がった。腕を掴むのは十秒ルールがあるから駄目なのである。

「長いんだよなあ、これ」と青年が面倒臭そうに溜息をつく。

（壹拾肆！）

（壹拾伍！）

少女も大きく震えて青年の腕にしがみつく。両側から固められ、カイムは身動きが取れずに小さく唸った。

「……あ、ちよっとくつつきすぎじゃないですか。カイムさん困ってますよ」

ガリーナがふと反対側の少女を見咎め、小声で注意する。すると少女は柳眉を下げ、ますます強く彼の腕に縋りついた。

「ただだって立ってられないんだもの……。ガリの聖女さんこそ、離れたらいいと思います」

「やです、私だって怖いです。立てないなら座ればいいじゃないですか」

「あ、そうか。さすが」

ほんと手を叩くと、少女はカイムを解放しその場で正座した。居心地の良さに何度か大きく頷くと、嬉しそうな笑顔で「腰が抜けたら座るのが一番ですね」と二人を見上げて言う。

カイムは少女とガリーナを代わる代わる眺め、小さく溜息をついた。

「君らは友達になれると思う」

「へ——え、ええ！？ ガリの聖女さんと私みたいな又ケ作が？ そんな恐れ多い、私なんか些細な愛と無い勇氣と夏場の水溜りに湧いたボウフラだけが友達です！ それに勝負しに来た敵なのに、そんな、駄目です！」

萎縮する少女とは裏腹に、ガリーナは良い事を思いついた子供のような顔でカイムの手を離して少女の隣に座り込んだ。

「そうです、なんで今まで気付かなかったんでしょう。外の人とお友達になれるなんて、凄い事です。よろしくお願いします」

「そんな……私なんか……」

ガリーナは真っ直ぐな瞳で少女に片手を差し出す。そんな聖女を見て、巫女は無性に泣きなくなってしまった。

——ああ、自分はなんて馬鹿だったんだろう。

人に認められたい、そんな利己的な理由で勝手に彼女を敵と看做して、あまつさえ襲いかかるうとしていたなんて。そんな事も知らず、ガリーナは純粹な笑顔で友達になろうと言う。

彼女は何の偏見も無く、認める認めない以前に、最初から少女を受け入れている。

ガリーナの前では、益々自分がみじめで愚かな毛虫に思えた。

——でも、それでも。

差し出された手に触れようか触れまいか、十二分に躊躇した後少女はおずおずと手を出した。そして軽く力を込めてお互いが手を握り、ぶんぶんと上下に揺らす。

——少しでもこんな輝くような少女に近づけるなら、それはとても素敵なことだと思った。

感極まったように、少女は俯いて涙声で言う。

「よろしく…… お願いします」

聖女も嬉しそうに相好を崩し、いつまでも相手の手を取ってふりふりと揺らしていた。

その様子を彼女達の頭上から眺めていたカイムも、いい話だ、と

呟いて微かに笑う。

そして暫くの静寂を存分に満喫したあと、ふと思い出して顔を上げた。

「あ、ごめん。ええと何人まで行っただけ？」

三人の反応を待機していた霊達は、怒ったように頬を赤くした。

尤も、元が青白いのでより濃い青色になった、と言う方が正確だ。
（貳拾伍だよッ！　なんで聞いててくれないのさ、この日の為に二十時間も練習したのに！）

（そうだよ酷いよ、これだから大人は！　そんなんじゃ僕ら美少年合障団に入れてやらないぞ！）

カイムは至極冷静に返した。

「そうしてくれると嬉しい」

ふらりと一人の少年霊が細い手を額に置いて後ろに崩れかけた。

周囲の霊達がそれを慌てて支え、つぶらな瞳できつとカイムを睨みつける。

（ああ、なんてこと！　みんな、将来美青年になってもあんな大人になっちゃ駄目だよ！　健気で無邪気でちよつと鬱陶しい、そんな美少年の心を忘れないでいるんだよ）

（うん、解ってる！）

（大事なものはふくらはぎでも太股でも細腰でも上目遣いでもなくてハートなんだよね！）

だからさ、とカイムは首筋を掻きながら、長い睫に彩られた目を潤ませて誓いを胸に刻み込む少し暑苦しい美少年たちを眺める。死んでいる者に将来も何も無いだろうと思った。

「俺けっこう歳だし。もう少年ってガラじゃないし。脛毛とか普通にあるし。取り敢えずここは俺の家になったから、とっとと出てっ
てくれ。夜中に歌うのもやめてくれ」

すると美少年霊達は顔を見合わせ、嘲笑するようにくすくす笑いあう。まるで子猫が何も解っていない馬鹿な玩具についてじゃれ合いながら語るようなその仕草に、カイムはなんだか無性に苛々して

きた。

（僕ら美少年合障団の二軍に、美少年合障団シニア部があるから平気さ。まあ僕らの若さの前には多少レベルも下がるけど、君みたいな自棄っぱち系美青年は今までにないタイプだから重宝するよ。さあ、僕らと共にめくるめくウィンドウツドお耽美ワールドへ！）

「やけっぱちけい……」

恐らく今まで言われた事の無い形容名詞だったのだろう、どこか腑に落ちない表情で地面に視線を落とす。するとそれまで意気投合し二人で何やら手を繋いで甘いものや聖騎士団について語り合っていたらしい少女達が顔を上げ、勝ち誇った顔の美少年霊の群れとカームを交互に見て言った。

「自棄っぱち系ってなんか新しいですね。いい感じかも」

「だよねえ」。でも、なんかこのお兄さんはちょっとあの子達とはジャンルが違う気がする」

「あ、それ思います。何かぱつと目で全然違う……」

二人は一瞬黙り込み、そして同時に手を叩いてああと声を上げた。嬉しそくに霊達を一直線に指差し、

「毛深すぎ！」

と叫ぶ。

その言葉に硬直したのは少年達だ。皆一様にぼかんと口を開け、その言葉の意図するところが全く理解出来ない相貌で滑らかな青白い自分の腕や脛を急いでチェックする。そしてどこにも無駄毛が生えていないことを示唆しながら、憤慨して叫んだ。

（どこが毛深いつて言うのさ！ 失礼しちゃうよ！）

（女子は黙ってるよ！ ここは美男子の楽園なんだ！）

ええー、だってー、と女子達は頬を膨らませてもう一度少年達を指差す。

「顔が」

一瞬の間。

永遠とも思える静寂。

そして爆発。

（これは睫毛だろうがああああ！！）

（音を立てるほどのバツバサ睫毛は美少年の宝だろうがあああ！！）

（だから女子は嫌いなんだとつとと帰れえええ！！）

少年たちは打って変わった悪鬼の形相を作り、犬歯を剥き出していきり立った。音を立てて触れ合いそうな上睫毛と下睫毛を震わせ、発せられた冷気が嵐となって三人に叩きつけられると、部屋の温度は急低下する。

「きゃ！」

「止めろと言った！ 出て行くのはお前達だ」

冷風の中でなんとか倒れないように足を踏ん張り、小さくなって体を固めている二人を守るように立つカイルだが、霊達は馬鹿にしたように鼻で笑うだけだった。

（何が出来るのさ？ 何も出来ないでしょ？ だってその女子達に見られちゃうもんね。さっきは上手いこと隠せたよねえ）

風は一層強く青年を叩く。

黒髪を掻き乱されながら、同じく黒い瞳で浮遊する霊達を睨みつけた。

（君は不思議だよ。おんなじ匂い、あの人と同じ。でもどうしてここに居るの？）

（だけどあっちも相応しくない。君の世界はどこ？ 本当は居場所が無いんでしょ？）

（だからおいでよ——僕らの、どちらでもない世界へ）

身を切り裂くような冷気を帯びた風は、まるで氷雪のように荒れ狂う。ガリーナはヴェールが飛ばないようにしっかりと頭を押さえつけ、隣の少女と共に歯を鳴らして身を寄せ合って強く目を閉じて堪えている。

それを肩越しに一瞬だけ垣間見たカイルの口から獰猛な声が漏れた。

「……おい餓鬼ども、俺が笑ってるうちに大人しくしとけよ」

既に愛想の片鱗すら見いだせない男の声に、少年たちは哄笑を止めた。それでも風の力は衰えない。

「痛い目見ないと解らないか。冥府の星に還る勇氣も無い餓鬼風情が、大人の暴力教えてやる！ 齒ア食いしばれ！！」

カームは一步前に踏み出す。しかし次の瞬間、背後の少女たちの短い叫び声に体を硬直させた。

（僕らの思いやりが届かなかったみたいで残念だよ。折角君を仲間にしてあげようと思ったのにさ）

振り返ったカームが見たものは、二人の少年霊が青白く細い腕でガリーナと巫女の頸を押さえている場面だった。彼らは口の端に刃のような薄い笑みを浮かべ、人ならざる妖気をもって改めてカームを見つめる。

少女たちは喉を締め付けられる苦しみに喘いだ。

「止せよ」

カームが静かに言う。

「それ以上やるなら、もう一度死んでもらう。屋敷ごと壊す。お前らが俺の何をどこまで知っているのなんて関係無い。俺にはそれが出る」

（出来ないでしょ。この子達も死んじゃうもん）

殺意をこめた睥睨を霊に投げると、カームは歯噛みした。こうしている間にも、彼女達の体温が精気と共に彼らに奪われてゆく様がカームには分かる。青い顔でぐったりと目を閉じるガリーナは、嘘のように静かだ。

このままでは、死んでしまう。

彼女と巫女が死ぬよりマシなことを、瞬時に脳裏に浮かべてみた。

「……分かった。お前ら剛毛の言うとおりにしよう」

（じ、剛毛言うな！！……ふん、最初からそう言ってくれば良いのに。毎度毎度冥府からこっちに来る手間がはぶけたものをさ。まあいいや、これで君も死んで晴れて少年合障団シニア部の団員だ！　まずは会報の特集組んで写真会と握手会、衣装合わせに歌とダンスの特訓！　今年のツアーに間に合わせるよ！）

カームは歯を食いしばって俯いた。

「ぐ……」。妙に大手ネットワーク持ちやがって、最初に屋敷をふっ

飛ばしとけばよかった……」

反対に少年達は嬉々として飛び回り、彼の無念の言葉など聞いてはいない。

（当然ジャケットの下はマッパか、またはシースルーね。場合によっては膝下も出して貰うよ、ちゃんと剃ってね。あとは、クール系は間に合ってるからヨゴレ系に回ってもらおうかな。金ダライとか熱湯風呂とか、メンバーとの絡みも含めてこれで婦女子霊のハートをがっちり掴む！ 最初が肝心だよ！）

——やっぱり二人には死んで貰おうかな……。
ちらりとまだ頸を掴まれているガリーナと巫女を見て、そんな迷いが生まれた。

この歳になって成仏できない冥府の霊相手に星だの夏だの渚だの夢だの歌いながら踊り狂いつつ肌を露出させるなんて、ご先祖様に顔向けが出来ないどころか誰とも目を合わせられない。マジで。

けれども、比較してみた。

あの能天気で馬鹿なまでに純粋なガリーナが冷たく固くなることと、どちらが悲惨なことなのか。

「……まあ、結構人並には生きたしな。人生の罰ゲームってことで良いや。さつさと殺せ」

顔を上げて目の前の少年を真っ直ぐ射抜く。

霊は嬉しそうに笑って、カイムの眼前まで手を上げた。

青白い光が視界いっぱいになり、頭の先まで突き抜けるような冷気が浸透し、彼は目を伏せた。

その時――。

「駄目です……」

体を弛緩させていたガリーナが、うわ言の様に言葉を発した。カイムは思わず目を見開き、彼女の姿を探す。暗がりの中でも、座り込んだ少女の翡翠色の瞳は全てを吸い寄せるような輝きを放っていた。

「そんなの、カイムさんじゃない。踊って歌って女の人に追いかけて。

られるなんて駄目。カイクさんは、この村で生きるんです。美味しい料理を作って、みんなを喜ばせるんです！ 貴方達のお遊戯は死人のものでしょう、なら帰りなさい生足！！」

ばちん、と音がした。

ガリーナを掴んでいた少年が、頬を押さえて啞然とした表情で彼女を凝視している。周りの霊達も自失したように動かない。

何が起こったのかをカイクが理解するには、数瞬かった。

霊の頬を張ったのだ。

ガリーナは、渾身の力を込めて手を振り回し、頸を押さえつけていた霊を思い切り張り倒したのだ。

「霊に——触れた？」

蹲って咳き込んでいるガリーナを見つめ、ぼつりと呟く。人にとって霊は気体で、霊にとって人は固体だ。彼らに触れることはあっても、人が彼らに触れることは出来ない。それが出来ないからカイクは諦めたのだ。

それなのに、この聖女は——。

その時、巫女を押さえていた霊が唐突に悲鳴を上げ飛び退った。

（痛いッ！ め、目に沁みる！）

（痛い痛い痛い！ 何だよこの女子——）

（……あ！）

唐突に苦しみから解放されて、ベそをかいて尻餅をついている少女の体中に付着している白いものを見つけ、霊達は慄いた様に引いた。よく見るとその白い粉は頭から胴から足から、彼女の体を覆うように吹き付けられている。暗がりだから、目を凝らさないとほとんど気付かない。

（塩だ、こいつ塩かぶってる！）

一人が甲高い声を上げると、残りの少年達が一斉に絹を引き裂くような悲鳴を上げた。

「え、」と当の本人はきよとした顔で自分の手や髪に触れ、付着している塩を舐めて驚いたような顔をする。隣のガリーナも一転

して興味津々で少女の頬に付いていた白い粒を取って舐め、不思議そうに首をかしげた。「なんでお塩なんかかぶってるんですか？」泣き笑いの相貌で首を横に振ったのは、少女自身がその理由を誰よりも一番知らなかったからだろう。

（いやだ、塩分はいやだ、お肌が荒れる！ 溶ける！）

（いやあつ、僕の玉のお肌が！ ニキビが、ニキビが）

声変わりもしていない霊達の二十人強がきやあきやあと上げる悲鳴は、風よりも強く空気を震わせて反響した。カイムは憎しみを覚える程に機嫌が悪くなった。

すぐに二人の元に走り寄り、守るように立つ。

もう彼らの仲間入りをするなんて事は考えられない。ガリーナの一声で、全てが明瞭に導き出された。

「二人とも、目を閉じていろ。すぐに終わるから」

据わった目でそう言い放つと、カイムは目を閉じて意識を集中させる。

空気が瞬時に入れ替わった。冷風は突如として空の匂いと変貌し、見えない力がカイムに集まる。

いや——外ではなく、内側から生まれる。

ぎゃあぎゃあ騒いでいた霊達もその魔力の発生にぴたりと動きを止め、目尻を吊り上げて牙を剥いた。

（屋敷を壊すつもりだね、させないよ自棄っぱち系！ ここは折角見つけた僕らの家なんだ！ セット！ ポジション『ドンゴロス』！）

一瞬にして整然と並んだ少年達は、赤、青、金に光る煌びやかな服に身を包んで三人を見据えた。勿論太股から下は露出している。カイムはその様子を眼前に焦り、思わず冥魔術の発生を中断させてしまった。

——間に合わない……！

その隙を逃すはずもなく、合障団は冷酷な笑みと共に高らかに宣言する。

（さあ僕らの偉大さ可愛さアイドル性に恐れ慄き後悔し仲魔にしてくださいと地に頭を擦り付けるが良い！ ファン垂涎のデビューナンバー、『仮面武闘会』世界に一つだけの幕』を聞けえ！！）
「ほ、本気かお前ら！？ ガリーナ、しょぼん玉、耳を塞げ！！」
咄嗟に耳を塞ぐカイルを見て、後ろの二人も取り敢えずそれに倣うのだが。

その――

その歌は、凄まじかった。

部屋は揺れ埃は落ち屋敷は鳴動し、冷風は嵐となつて荒れ狂う。
今までに無い衝撃が人間達を襲い、膝からは力が抜け、危うく倒れそうになるところをなんとか踏ん張る力も出ず、結局地面に膝を落とす事になった。

「ゆ、許せない……！ 半オクターブずれてるんだよ！ なんて気付かないんだよ！ 新手の兵器だこれはッ！」

「何この感情……殺意と憐憫と哀愁が深淵より湧き上がるこの独特の……！ 痛い痛い痛い痛い、お願いもうやめてえ！」

こうなつては反撃など出来はしない。

音痴の中の音痴を極めた世界新記録の周波数の中では、例え伝説の聖騎士といえども丘に上がったおたまじゃくしのように干上がるばかりだろう。

冷や汗を流しながら、カイルは己の無力さを呪った。少し前の自分なら、こんな醜態は犯さなかったのに。アルプー領主の件にだって、万事滞りなく進む出来たはずなのに。今頃はこんな場所で霊の壊滅的な歌声に身を振らず、領主の館で料理人として安寧とした生活を送っていたはずなのに。

そうだ、全ての元凶はあの聖女だ。

彼女に出会ってしまったから、全てが変貌した。

彼女にさえ逢わなければ、自分は――。

反射的にカームは後ろを振り返った。音の凶器が乱舞する中、ガリーナだけがただ一人耳に手も当てず真剣な面持ちで宙を乱舞する鬱陶しい少年どもを凝視している。

そしてぼつりと呟いた。

「私、この歌好きです」

「え」

絶望とも驚愕ともとれない表情でカームが呻いた、その時だった。遠いどこかで、鐘の音が響いた。

長く透き通るような韻は空気を揺らし、凝った風を押し流すように響く。割れた吹奏楽器のような歌もぴたりと止み、辺りには異常な静けさと美しい鐘の音色だけが広がる。

ガリーナはぼかんとしてその音を聞いていたが、やがて眉を上げた。

「私の家の鐘です。誰が鳴らしているんでしょう……というか勝手に私の家に入った人がいるんですね！？ 机の上に日記を出しっ放しにしてました、どうでしょう！ カームさん、どうでしょう！」

「うん、今度からは日記にも鍵をかけるべきだね」

意味不明の遣り取りにいいよ氣力を削がれたカームは、自分が自棄っぱち系に分類される理由が解った気がした。

（こ、この軽妙なエイトビートは……まさか伝説の……！！）

（ああ、体が……消え……）

空中に舞う青白い体が徐々に薄くなつてゆく。その苦悶の様子を目の当たりにし、カームは思い直したようにぎらりと目を光らせた。

「あ、もしかして……お塩振りかけたの、ひつじさん？」

鐘のリズムに合わせてふんふんと顎を揺らしていた巫女の襟首を掴み上げると、

「永遠に死ね耽美野郎！ 初めて会った時から嫌いでした！！」

「うぴええあああ——！！？」

塩まみれの彼女を合障団に向かって投げつける。

塩嫌いの彼らにこれは堪らない。まるでトーマスボール（注釈：トーマスおじさんが提案した酒瓶を並べて樽を転がしていくつ瓶を割るかを競った遊び）の瓶の如く、短い絶叫と共に激しく弾かれある者は霧散しある者は大気に溶ける。

当の彼女は月面宙返りをした際に足を天井にぶつけ垂直落下しごろごろ転がり上手い具合に正座した所が壁際の棚の前で降ってきた埃とがらくたの洗礼を受けて沈黙した。

（折角歓迎してあげてたのに）

（君はあの人達の……なのに）

（ずっと遊……かったの……に）

反響する囁き声は徐々に掠れ、深い穴へと沈むように消えていく。最後に微かに聞こえた言葉に眉を顰めたカイムは、「いいや、もう来るな」と吐き捨てるように返す。

……終わった。

何もかも終わった。

大きく溜息をつくとき、カイムはその場に座り込む。

しかし次に、死ねって言った、とガリーナが慄くように呟いた声と、静かになった天井がびしりと鋭い音を鳴らせるのはほぼ同時だった。

びしり、ばしり、と音は徐々に間隙を締め、はらはらと埃も落ちてくる。

「何ですかこの音」

「ああ、屋敷の木造の部分が崩れる音じゃないかな。なんせ七十年も放置してたからね、あの歌で止めを刺されたんだろう。はは」

「ははって。どこですか木造の部分って」

「ここ」

「……どこ？」

「だから、ここら辺りの一棟」

ぴしぴしぱきぱきと遙か頭上から不吉な音がする。ガリーナが口元を痙攣させて目の前の青年を見つめている間に、瓦解は始まった。

落ちてくる屋根のシャワーの中、聖女の悲鳴が響いた。

執事は望遠鏡で瓦解した屋根の下から中にいた者が這いずり出てきたのを確認すると、小さく笑う。

「悪霊には塩か鐘か親父の説教と相場は決まっております。勉強不足ですな」

満足げに独り言ち、最後に一発、満身の力を込めて鐘を打ち鳴らした。

それは今迄で一番美しい音色で啼き、風にその声を乗せ、ついでに彼女自身も風に乗り——ズドン、と大地に厳めしく降臨した。執事は木槌を構えたまま無表情で微動だにしなかったが、やがて眼鏡を押し上げる。誤魔化すようにもう一度小さく口の端を上げると、疾風のような俊敏さで鐘楼から姿を消した。

+

「——はっ。あ、あ、わたしのご飯！腐ってるけどまだ食べられます！いやああ返してえええ！！」

「君、どんな生活してるんだ」

がば、と飛び起きた巫女が見たものは、青い空に緑の森。そして目の前で呆れた顔をしている黒髪の青年と、埃だらけのスカートを叩いている聖女の姿だった。

背後を振り返ると、一部瓦解して土埃を上げている屋敷が静かに鎮座している。

「あ、ああ……。なんだかとても悪い夢をみていたみたい。巫女仲間に苛められて、聖女と勝負をしに田舎に行って、悪魔のようなひつじさんに幽霊屋敷に放り込まれる夢。良かった……全部わたしの脳内だったんだ……」

「貴女、苛められてたんですか？」

「な、なんで知ってるの！？」

カームはもう何度吐いたかも分からない溜息を漏らした。

ガリーナが自宅の鐘を毎日鳴らしてくれるのならば、ゴキブリのようなあの連中ももう姿を現すことは無いだろう。

「アイドルさん達が言ってた、『あの人』って何のことでしょう？」
不意に話題を振られ、カームは小さく笑った。

「ん？ …… さあ。幽霊の言う事だから当てにならないよ」

「そうですか。何かカームさんが物騒なことを言っていた気もするんですけど、さっき頭をぶつけちゃってあんまり覚えてなくて……。あ、でも、カームさんが私を嫌ってないことは覚えてます！」

心底嬉しそうににこにこ笑うガリーナの頬は、黒い煤のような汚れが付いている。

「嫌ってはいないけど、」とそれを服の袖で擦りながら、カームは軽い調子で続けた。

「ちよつとだけ憎んでるかも」

「うえ、」

その時、道の向こうから執事とキリア、マーブルらの姿が現れ、カームは立ち上がってそちらへと向かう。

「カ、カームさん、私なにかしましたか？ もしかして日記に悪口書いたの知ってるんですか？ あ、それともタダでご飯をご馳走になろうと思ってるのがバレた？ あとはんとは少しだけ歌って踊るカームさんが見たいと思ったことが」

面白いくらいに一人でどんな墓穴を掘る少女の足音を背後に聞きながら、思わず口の端を上げる。額の絆創膏を剥がして捨て、こちらに駆けて来る少年に手を振った。

「さて、どうしようかな。バーババ亭は給料未払いで、九里金豚はゴキブリ入りのスूप出してたんだっけ。迷うところだね」

いつも通りの穏やかな相貌に小さな微笑を浮かべつつ、青空を仰ぐ。

雲ひとつ無い麗かな陽気は、初夏の訪れを告げていた。

「待ってください、カームさんー！ ご飯は諦めますから、許して

くださああい！」

泣きべそをかきながら追いかけてくるガリーナの言葉も、耳触り良く風に乗った。

+

そつと遠くから彼らの姿を見つめていた巫女は、ふうと息を吐くと誰にも気付かれぬように踵を返した。

王都までの長い長い草原街道を一人で歩き、時折すれ違う兎や燕や旋風に目を細め、やがて傾き始めた太陽の光を一身に浴びる

聖女と勝負して勝ったら認めてやる、そんな苛めっ子の売り言葉買い言葉を本気にして、こんな田舎の村までやって来た。その愚かで幼稚な行動も、今となつては無為であるとは思わない。

「わたしの負けです、ガリーナ。貴女は戦う前からわたしに勝つてた。でも、いつか」

——いつか、貴女のように底なしの笑顔で笑う事が出来たなら。

その時こそ、自分は誰よりも強くなるのだと思う。

そして巫女は、この村に来る以前よりは強くなった。恐ろしいものと戦うという経験をしたし、人に助けられるという経験をしたし、見知らぬ村の友達を作るといふ経験もした。

経験は、何にも変えがたい宝に違いない。

「また遊びに行こうつと」

輝くような笑顔で夕暮れの空を仰ぎ、ふと少女は足を止めた。

草原を見回し、背後を振り返り、行く先を見て――

「……どっちが王都だったけ？」

かあ、と鴉がやる気の無い声で啼いた。

数日後、王都とは全く違う方向にある町の近辺で大泣きしているいい歳の迷子がその地方の領主に保護されたことは、特に話題にはならなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1796b/>

微瞑むように 【第二話 今にも落ちて来そうな屋根の下で】

2010年10月8日14時57分発行